

515  
35

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



575-35



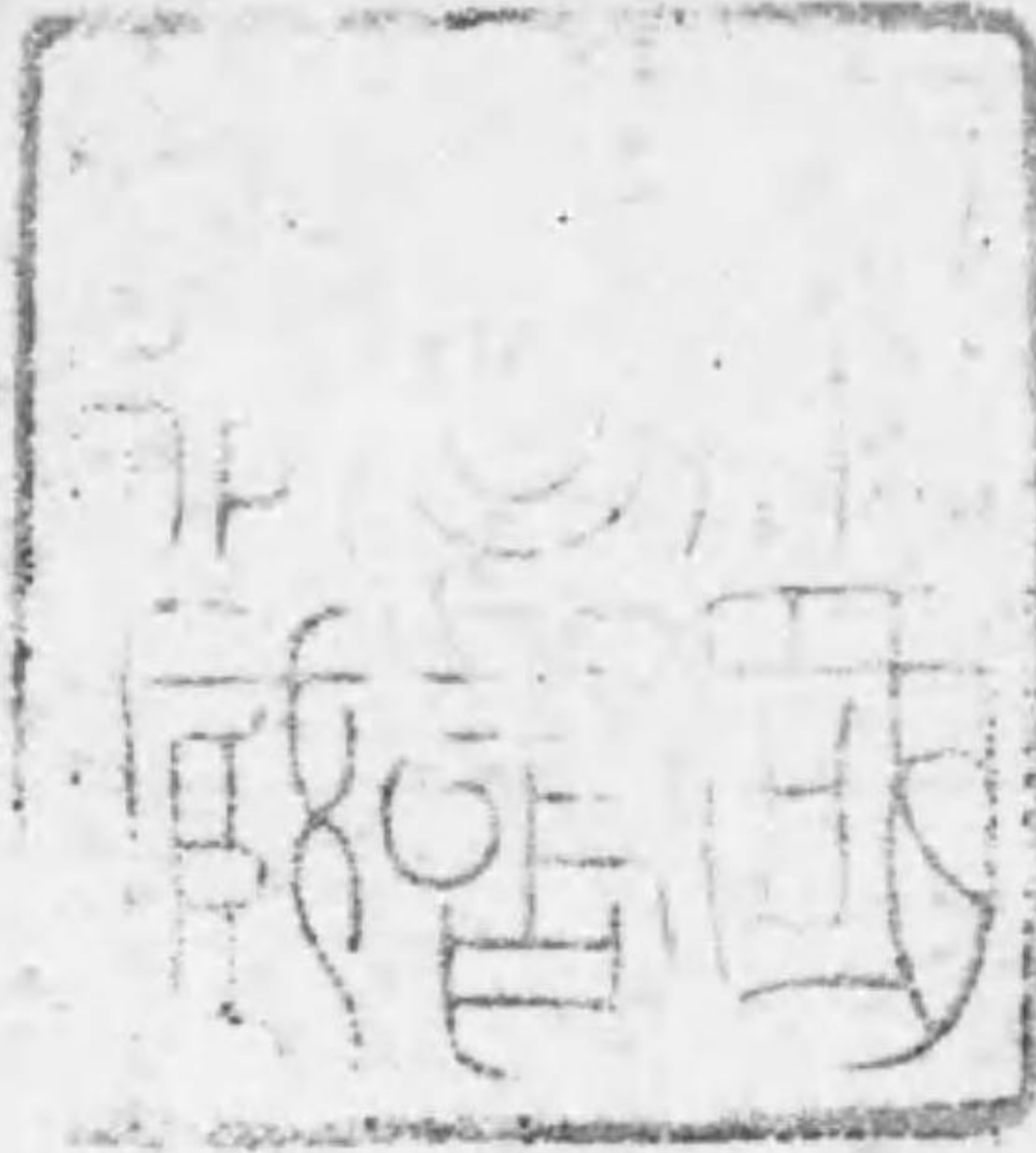
オウガスチン

懺悔録

宮原晃一 譯

大正  
12. 2. 2  
内交

575-35



オウガスチン

懺悔録

宮原晃一 郎譯



### 聖オウガスチン略傳

アウレリウス・アウグステイヌス(オウガスチン)は三百五十四年十一月十三日アフリカ州タガステの市に生れ、カルダーゴに於て修辭學(或は雄辯學)の教師となり、廿七才のとき「美とその適應について」なる一論文を著した。三百八十三年にローマへ行き、そこで二三ヶ月修辭學を教へ、其處からミラノ(ミラン)へ行き、司教聖アマブロシウスに感化せられ、三百八十七年四月二十五日洗禮を受けた。その母モンニカ間もなくオスチャで死す。三百八十八年彼は故郷タガステに歸り、その財産を賣り拂ひ、貧民に施し、三ヶ年の間隱遁の生活を送つた。三百九十一年、彼はヒツボの司教ワレリウスに代つて司祭に任ぜられて、三百九十五年、その後を襲ふてヒツボの司教となつた。三百九十七年から四百年にかけて多くの著述をした。四百三十年八月二十八日齡七十六才にして、ヒツボが異狄アングルの圍みを受けてゐるうちに歿した。

### 譯者序

世に三大懺悔書としてジャン・ジャック・ルツソオ *Les Confessions* レエフ・トルストイの *Isповiedi* と、本書とを推すうち、その年代の最も古いものは本書である。而して他の二書が社會に對し、公衆に對しての告白であるのに本書は獨り神に對する告白である。それだけ他に尠ない宗教味が本書に於て豊かに見出される。

然しどれ程文化が開發せられたとて、それは畢竟外面的のものではなからうか。形而上的方面に於ては、人は只智的に多くの進歩を経來つたにも拘らず、感情の方面に於て依然として三千年以前も今も聊かの變りもないではないか。理智に統御コントロールされた情といふものが如何にも望ましいとであり、また或る程度までは可能であつても、所詮理智なるものは我々の生活を形造くる一要素に過ぎないで、全的のものではない。我々の全生活の主なるものは依然としてハートである。理智の統御なるものも斯う觀すれば、それは單に賢い侍女、

補弼の臣の役目をつとめるに過ぎない。理智至上の發現たる科學についてベルグソンは言つた——「科學は逆も生命をとらへることは出来ない。それが鳥でも獸でもの生命をしらべるとき、そこには生命はない、たゞその屍體があるばかりだ」と。解剖刀と、試験管と、微顯鏡とによつて死骸をいぢくる科學は、その考察に於ては單なる外的の記述と、蒐集したる與件の整理に過ぎない。思想の女主人<sup>ミセス</sup>公はこれによつてその弛緩放埒に流れんとするのを防ぐだけで全生命に對しては甚だ無力である。だから文藝宗教なるものが、如何ほど世の中が進歩していつても、舊きは舊いまゝで價値を失はないで、永遠に嘆賞され、信仰される所以である。それは理智がどうしても到達し得られない人生の核心に觸れ、全生活の中樞を把持してゐるが爲めに外ならないである。

聖オウガスチンの懺悔録は、その書かれた年代の古く、其敘述の方法といひ、文體といひ非常に今日のものとは異なるのであるが、しかも之を讀んで我々が打たれ、感動さ、れることは毫もその書かれた當時とちがはないと斷言し得られる。勿論自我意識の非常に強く、

人間といふもの、力を過當に見積つてゐる現世紀の子等には、彼等が勇敢に行ふ悖德非行を聖人が多くの恥と悔ひをもつて神に——遠の昔彼等にとつては死んだ筈の！——告白し、その恩惠によつて始めて救はれて安きを得たといふことが、頗る可笑しいにちがひない。けれども眞に深く自己を省察するものには、人間の靈の惱みといふものが、如何に永い年月の推移も遂に變遷、消滅することなく、その唯一の解決はまた遂に頓悟して信仰の道に入るか、或は墮落に滅亡するの外ないことも千歳の後今なほ昨の如くである。

だから我々はオウガスチンの苦惱煩悶を讀んで、直ちに自分の身に引きくらべて、同感することが出来る。彼が經歷は即ち我々の經歷である。肉慾、榮達の誘ひは、オウガスチンの時代にもまさつて今我々を苦しめ、汚すものである。「様々の教への風に靡かざる、」は、昔よりも今がひどい。怪しけなマニケウスの宗教から、希臘の懷疑主義に入り、再轉してネオ・プラトオン哲學に、三轉して遂にカトリックの信仰に入つた彼が「天路歷程」は怪しけな人道主義、科學的の決定論、生半可な唯物史觀、いかもの、親鸞崇拜等、變遷

推移止むことない今日我々の思想状態そのまゝではないか。しかも我々は遂に歸するところを知らないのである。

我々が此書を読んで感ずることは、著者が自己の非をかざり、また隠すことなく、極めて卒直に、大膽に、また熱情を以て總てを記述してゐることである。神に直接して語てゐる聖者の言葉としてよりも寧ろ我々に對して、謙虚な態度で、ありし昔の我が罪の數々を説き、迷ひの徑路を示してゐる點である。此處には世の一般の宗教家が殊更に自分の罪を懸値して、自分が悔改のエラサを吹聴するやうな厭味がない。此厭味は宗教を喰ひ物にしてゐる人間、殊にクリスチヤンに多いが、聖オウガスチンにはその點が味塵もないので、讀んで不快を覚えさせるところがない。只聊か談理に墜ち、くどくどと神を呼ばう缺點がないでもないが、それは大した疵でない。我々は本書を讀んで依然甚大な興味とその熱烈な信仰に打たれるのである。

本書に讀むに當り、一應記憶して置くべきことがある。譯者は自分の義務として、それを次に書く。

懺悔録はどうして書かれたかといふに、之は聖人の晩年に、その徳行を賞讃する聲が餘りに嘖々と聞えるのを、そのお生涯を顧みて愧怍たる彼は、一つは不常なる賞讃をおさへんが爲め、二にはその救はれた恩寵を天父に對して感謝せん心から、三には之によつてその傳道のたすけとなさんが爲めに書いたもので、その年代は彼の母、聖モンニカの死後約十三年即ち西曆四百年頃、聖人がアフリカ・ヒツボの司教をつとめてゐた折りである。

聖人がカトリック教に入る以前に信奉してゐたマニケウス教といふのは、マニケウス、或はクウブリクスといふ西曆紀元二十六年バビロンに生れたものが起した宗教である。彼は天の啓示を得たととなへて、東方を巡歴して、印度や支那までにも入つた。そして當時のペルシャ皇帝シャブルに認められホルミズド第一世を教化し、後パーフラム第一世の爲め十字架につけられて、皮を剝がれた。

彼の説は二元論で、ヘルシヤ思想の特色を有てゐる。即ち光りの諸靈はノア、アブラハム、ゾオラスター、佛陀、及び純粹な靈で、その身體は幻影に過ぎないところの耶穌等の諸々の豫言者を地上に送る。然しマニケウス自身は神聖な要素最後の産であつて、イエスやボウロの仕事、換言すれば光から暗を分離する役目を果しに來てゐるといふのである。マニケウス教はバビロンを中心にして、次にはサマルカンドを主として、その本國に榮えた。それが西方に入つたのはデオクレシウスの頃である。しかも烈しい迫害を加へられたにも拘らず、それは非常な速度で羅馬帝國に傳播した。特にコンスタンチン帝の御宇以降が一層甚しく、北アフリカではオウガスチンの時代には盛んに基督教の儀式を取り入れ殆んどキリスト教と外觀上は大差なかつたのである。聖人が先づ之から進んでキリスト教徒になつたのは當然であらう。

本書に用ひた人名地名等は在來呼びならはしたものはそのとほりにして別に異をたてな

かつた。即ちアウグステイヌスをオウガスチンとした如きはその一例である。けれども其他は多くはラテン讀みとした。尤も伊多利の地名のうちでは、伊多利語の發音で在來のものとした相違のないのは、そのとほりにして置いた。たとへばミランをミラノとしてメデオラーヌムとせなかつた類である。

また基督教々職の名は成るべく天主教の用語を用ひた。たとへば Bishop を監督とせず司教とした如き類である。プロテスタントのなかつた時代のことだから、その方が感じがよくと思つたからである。

譯者はラテン語は至つて拙劣なものである。然し翻譯は必ず原文によるべきものと信じてゐるところから、テキストはラテン本に及ぶ限りとつて譯した。只全體に於て達意を主として、語調や情調や、文法に拘泥することは避けた。文體の如きも、最初は舊式の漢文雅語の混淆を試み、次には「である」流を、最後に、現在のものに落着いた。古典といふ

感じを出すには、古い文體がいゝだらうし、また簡明直截な趣きをみせるには「である」がまさらう。然し本書は虚謙な心を以て、神に自己の非を述べ、その救ひの功德を嘆稱するのであるから、祈禱の際に、我々が衷心から神に訴えるその話振りこそ最も適當なスタイルであると譯者は考へた。その結果が之である。

懺悔録は全體は十三篇から成立してゐるが、普通英譯などでは大抵十篇、または九篇まで、其餘は譯してない。その故は第十篇からは懺悔ではなくてオウガスチンの神學論であるから勿論興味はあるけれど、局外者には可なり煩はしいことがないでもないからである。本譯書は最初全譯の筈であつたが、叢書として、他書との均衡上、第九篇まで、即ち眞の懺悔録だけで、神學論は他日に割愛して置かなければならなくなつた。

日本語に譯された本書は在來二種ある。一つは宮崎氏のもの、もう一つは中山昌樹氏の

ものである。

凡そ總ての事業は最初に手をつけたものが最も困難に逢ふものである。またその爲めに手際が拙づくなるのは止むを得ない。後から行くものは既に先人の切り開いた路を行くのでやさしく、後になればなる程愈々容易に、かつ手際よくなるのである。だから先人のしたこと以後からのものは感謝すべきものである。此意味から譯者は宮崎氏と中山氏とにその勞を感謝するものである。殊に中山氏の譯には多くの解説や註がついてゐて、譯者にとつて非常の便宜を與へた。けれども原文の解釋については彼我の間に多くの相違があるけれど、あまりに煩はしいから、一々指摘しない。只譯者が之を特に此處にいふのは中山氏が立派なラテンのテキストにより忠實に譯された範模譯（さうした意氣込みがその序文に見える）と、此拙譯とが餘程相違してゐるが爲めに、此譯が粗漏、該譯に滿つるものと思はれないようにとの用意に外ならないのである。

尙ほ此譯は、なるべくラテンのテキストに従つたが、他の諸國語譯も皆それぐちがつ



てゐるので、ラテン古文の簡潔に過ぎて、それだけの直譯では充分意味のとれないところは可なり多くの布衎をしたと、修辭上の比喩も餘り我々に馴染がなくて、聯想を起させ難しを認めたものは、日本流に直したところもある。之は理解といふことを主としたが爲めに萬止むを得ない次第である。

我が主の御代一千九百二十二年九月三十日

譯者

## 目次

### 第一篇

一 神の讚美	一
二 神人合一	二
三 神の遍在	四
四 神の屬性	五
五 赦罪の祈禱と神	七
六 嬰兒と神の永遠	九
七 嬰兒も罪人	一四
八 少年時代	一八
九 嫌ひな學業と好きな遊び	二〇

十	遊戯に熱して両親の戒を忘る	二三
九	大患と洗禮の延期	二四
八	學問を強いらる	二七
七	荒唐無稽の古典	二八
六	希臘語と羅典語	三二
五	神の愛を祈る	三四
四	荒唐な話の害毒	三五
三	教育の無効	三八
二	人の掟は守り神の法律には背く	三九
一	少年の罪、大人の惡	四二
	神に恩賜を感謝す	四四

## 第二篇

一	罪の青年	四六
二	情 慾	四七
三	學業の中斷	五〇
四	盜 み	五五
五	原因なくして罪はない	五七
六	快樂の偽り	五九
七	赦免に對する感謝	六四
八	盜みを樂む	六五
九	共にするは樂し	六七
十	神への躍進	六八

### 第三篇

- 一 不純の戀愛……………七〇
- 二 演劇の誘惑……………七二
- 三 學生々活……………七六
- 四 シセロの影響……………七八
- 五 聖書を侮る……………八〇
- 六 マニケウス教に欺かれる……………八一
- 七 マニケウス教徒の愚……………八六
- 八 神の許し給ふ物……………九〇
- 九 罪と裁判……………九五
- 十 マニケウス教の虚妄……………九六

### 第四篇

- 士 母が涙の祈り……………九七
  - 士 司教の豫言的答へ……………一〇〇
- 
- 一 過誤の九ヶ年……………一〇三
  - 二 修辭學を教ふ……………一〇四
  - 三 占星術を學ぶ……………一〇七
  - 四 親友の死……………一一一
  - 五 涙は何ぞ甘いか……………一一四
  - 六 烈しき悲み……………一一五
  - 七 郷里を去る……………一一八
  - 八 時は慰藉者……………一二〇

九 神によつての友情	一一一
十 魂の憩ふ處	一一三
十一 萬有は變るも神は變らず	一二五
十二 神に於ての平安	一二七
十三 愛の源泉	一三〇
十四 美學の自著について	一三一
十五 神を求む	一三五
十六 アリストテレスの影響	一三九

## 第五篇

一 我が魂は神を讃む	一四五
二 神の不可避	一四六
三 フアウストスに會ふ	一四八
四 神を知らぬは不幸	一五三
五 マニケウスの邪教	一五四
六 フアウストスの淺學	一五七
七 期待は裏切られる	一六〇
八 母を欺く	一六四
九 再び大患	一六六
十 懷疑哲學と唯物主義	一七三
十一 ロマニケウス教と天主教	一七八
十二 下劣な羅馬學生	一七九
十三 アムプロシウスに會ふ	一八一
十四 信仰の萌し	一八三

## 第六篇

- 一 聖モンニカ來る……………一八六
- 二 母、郷里の迷信を棄つ……………一八八
- 三 聖人の教へ……………一九一
- 四 儀文と聖靈……………一九五
- 五 聖書の權威とその用……………一九九
- 六 野望は空し……………二〇二
- 七 友を回心せしめる……………二〇七
- 八 アリピウスの再誘惑……………二一一
- 九 アリピウス盗みの嫌疑を受く……………二一四
- 十 アリピウスの廉潔と、ネヴリデイウス……………二一八

## 第七篇

- 一 オウガスチンの困惑……………二二一
- 二 獨身と結婚生活……………二二六
- 三 オウガスチン妻を求む……………二二九
- 四 理想社會の計畫……………二三〇
- 五 舊の妾は去り、新たに妾來る……………二三三
- 六 死と審判の恐れ……………二三三

- 一 神觀なほ解けず……………二三六
- 二 ネブリデイウスの爭論……………二四〇
- 三 自由意志は罪の基……………二四二
- 四 神は不朽……………二四四

五 罪惡の起原	二四六
六 占星學の迷妄	二五一
七 惡の根元を計ねる苦	二五七
八 神の救ひ遂に來る	二六〇
九 プラトーン派と基督教	二六〇
十 神は不滅の光	二六五
十一 萬有存否の因	二六八
十二 萬有皆善	二六八
十三 神に惡はなし	二七〇
十四 遂に神を悟る	二七二
十五 萬有は神の眞と愛とを領つ	二七三
十六 萬有皆善、只或る物に不適	二七四

## 第八篇

一 老儒シムブリキアヌス	二八九
二 ギクトリヌスの回心	二九三
三 罪増せば恩も増す	二九九
四 大人物回心の價值	三〇三
五 歸正の障害	三〇五
十七 神を識ることを妨ぐるもの	二七五
十八 基督のみが救ひ	二七八
十九 基督の權化について	二八〇
二十 プラトーンの手	二八三
廿一 聖ボローの書翰	二八五

六	ボネテイチアヌスの事	三二〇
七	聖人の心動く	三一八
八	内部の争闘	三二二
九	心と肉體との關係	三二六
十	意志の多樣	三二八
十一	靈肉の争闘	三三三
十二	遂に歸正	三三八

### 第九篇

一	感 謝	三四三
二	教師の職を棄てる	三四五
三	二友人の聖なる死狀	三四九

四	愈々退隱	三五三
五	アムプロシウスの勧め	三六三
六	遂に洗禮を受く	三六四
七	迫害を道る	三六六
八	母、聖モンニカ	三六九
九	嗣モンニカの徳	三七四
十	モンニカ永生に入る	三八〇
十一	母の死	三八五
十二	モンニカの死を悼む	三八八
十三	亡き母の爲めに祈禱	三九五

### 目次終

## 第一篇

### 神の讚美

主よ、貴下は偉大にましまし、又大に讚美に價し給ひます。貴下の力は大きく、貴下の  
智恵は無限でまいます。そこで貴下が創造の一小部分たる人間は貴下を讚美せんと欲しま  
す。此人間、身には死滅てふことを、自分の罪の證據を、又其上に、貴下が傲慢な者を宥  
恕し給はぬ證據をすら帯びてゐる此人間といふものが、——しかもなほ且つ人間、貴下が  
創造の一小部分は貴下を讚美せんことを欲します。悦んで貴下を讚美させようとして、貴

下は私共を起し給ひました。ですから私共の心は貴下のうちに憩ふまでは安んじません。  
主よ私が先づ爲すべきことを知り、又理解さして下さい。貴下をまづ呼びませうか、或  
は褒めませうか。又貴下を知ることと、貴下を呼ぶことと、どちらを先に爲すべきでせう



か。けれども貴下を未だ知らない者が、どうして間違ひなく貴下を呼ぶことが出来ませうか。何せかなれば、其様な人は貴下の代りに、他の者を呼んで了ひませう。それとも寧ろ貴下を知る爲に、先づ貴下を呼ぶのでせうか。然し知らないでゐて、どうして貴下を呼ばませうか。又何うして説教者がなくて貴下を信じませう。更に又主を捜してゐる者は、主を讚美しませう。何せかなれば捜す者は主を發見するからです。そして發見したら、主をたゝへます。お、主よ、私は貴下を呼び、貴下を捜します。又貴下を信じて、貴下を呼びます。貴下は私共に宜べ傳へられたのものですもの。主よ、私の信仰は貴下を呼びます。此信仰は御子の人間性により、又貴下の説教者達の奉仕により貴下から戴いたもの、貴下が靈感せしめ給ふたものであります。

## 二 神 人 合 一

又私は、私の神で又主にまします、私の神をどういふ風に呼びませうか、分りません。

なぜかなれば私が神を呼ぶ時には、私自身のうちに神を呼び入れるのですから。又私がうちにどんな場所があつて、神が私のうちに來り給ふのでせうか、天地を造り給ふたその神さへも來り給ふからには。まつたく、噫主なる神よ、私の裡に貴下を含むことの可能な何物かありますか。貴下が造り給ふて、私をそのうちに造り給ふた天も地も貴下を入れますか。或は有るものは皆貴下が無ければ在り得ないのですから、有るものは何でも皆貴下を含んでゐますか。若し貴下が私の裡に在さねば、有る筈のない私といふもの、裡に、私は何せ貴下の這入つて下さることを求めてをるのでせうか。私は冥府にゐないのに、貴下は在すのです、よし又、私が其處へ降りても、貴下は矢張り其處に在すのですもの。だから貴下が私の裡に在さなかつたら、主よ私といふものは有る筈が無かつたのです、まつたく有り得なかつたのです。否寧ろ私が貴下の裡になかつたら、私は全く有ることができなかつたのです。萬有は貴下に出で、貴下を通して有り、貴下に歸屬してをります。その通りです。主よ、その通りです。然らば何せ私は既に自分が貴下のうちに在ると知りながら

貴下を呼ぶのでせう。又何處から貴下はお出でなさいますか。何ぜかう訊くかとを云へば、「自分は天と地とを満たしてゐるのだぞ」と貴下が仰せられ、私の神様が、その天地から私に御降臨します爲めには、私は天と地とを除いて、一體何處へ身を退きませうか、それが分らぬからでういます。

### 三 神の遍在

貴下が天地を満たし給ふが故に、天地は貴下を含有するのですか。或は天地は貴下を容れきらないから、貴下がそれをお満しになつても、なほ其處に貴下の過剰があるのですか。若しさうであるなら、天地が満たされた後、貴下の殘部を、何に貴下は注入なさいますか。或は、萬物を容れ給ふ貴下は、容れまつるべき物を必要となさらぬのですか。といふのは貴下のお満ちなさるのは、萬物を包容なさること、それによつて貴下はお満ちなさるのですから。まつたく、貴下のお満ちなさる容器が、貴下を安定に致してゐるのではあり

ません、といふのは、容器は壊れても、貴下は滾れることがないのですから。又貴下が私共に注がれ給ふ時でも、貴下が投げ下されるのではなくて、却つて私共を擧げ給ふのです。貴下がお散らされなさるのでなくて、却つて私共を蒐め給ふのですから。然し萬物に満つる貴下は、貴下の全體で以て、萬物總てに満ち給ふのです。それとも萬物は貴下の全體を容れられませんから、貴下の一部を容れてゐますか。又總ての事物は、此同じ部分を皆一緒に容れてゐますか。でなければ、各々その能力に相應した若干部を容れ、大は大を、小は小を容れてゐるのですか。従つて貴下の或る部分は大きくて、他の部分は小さいのでせうか。或は到る處總てと在まして、何物も貴下全體を包含してゐないのでせうか。

### 四 神の屬性

では私の神は如何なるものになりますのですか。私は訊きます、主たる神でなくて何であらうかと。何せなれば主の外に誰か主でういませう。又私共の神以外に誰か神でせう。

至高、至善、至強、絶對の有力、絶對の大能、絶對の憐愍、絶對の正義、絶對の祕密、絶對の近在、絶對の美、絶對の強、常住で、捕捉し難く、不變であつて、しかも萬物を變化せしめ、新らしくもなく、古くもなく、萬物を更新し、驕者を老ひしめて、彼自らを悟らしめず、常に働き、常に休み、蒐めてはる給ふけれど、何の缺乏があるでもなく、支へ、満たし、庇ひ、創り、養ひ、成熟せしめ、求めながらも、總てを持ち給ふ神よ、貴下は煩惱なくして愛し、憂慮なくして妬み、又悔みて、しかも悲まず、怒つて、しかも穩かに、みわざを變へ給ふも、目的を變へず、見付け給ふものを取り給ふても、何物をも失ひ給はず、乏しくはなくて、獲ることを悦び、貪りはなさらぬけれど、高利を取り、自ら債務者とならんが爲め、貴下に對して過分の要求を許し給ひます。しかも誰か貴下のものならぬものを有ちませう。貴下は借りずして負債を拂ひ、借財を返して、しかも失ひ給ふことはムいけません。けれども私の神、私の生命、私の聖き喜びよ、と私共は申しませうか。でなければ、誰でも貴下のことを語るとき、何と申して善いでせうか。けれども貴下のことを

語らぬ者は不幸です。といふのは他のことを喋つたとて、それは啞と變りがないからです。

## 五 赦罪の祈禱と神

誰か貴下のうちの憩ひを私に與へますか。誰か私の胸に貴下を入れて、私の罪惡を忘れ私の唯一な善たる貴下を抱かせる爲めに、此胸を醉はして呉れるでせう。私は貴下に取つて何ですか。どうぞ私に語らして下さい。貴下は私に、貴下を愛せよと命じ、若し愛しな  
いならば、私に對して立腹して、非常な患難を以て私を脅かし給ふではムいませんか。では貴下を愛しないことが、つまらぬことですか。噫、どうぞ答へて下さい。おゝ主よ、私の神よ、貴下は私に對して何でありますか。私の魂に言つて下さい「私はお前の救ひだよ」と。私に聞えるようにその事を言つて下さい。御覽下さい、私の魂の耳は貴下のみ前にム  
います。おゝ主よ、其耳を開いて、私の魂に言つて下さい、「私はお前の救ひだよ」と。私はその聲に跟いて走り、貴下を捕へませう。み顔を私に隠さないで下さい。み顔を見る爲

めに、死<sup>\*</sup>ないやうに、死なして下さい。

註\* イエホバの神を見る者は死すといふ信仰がユダヤ人にはあつた。しかも神を見ずとも死するのだ。(出埃及記二〇、申命記三一の一八。詩篇一四三の七) 神を見て死するは、死であつて死でない。死んでも本望だ。寧ろ神を見る爲めに死なう。是却つて不死の道だ、といふ意味である。

私の魂の家は貴下がお這入りなさるには餘りに狭いのです。どうぞ貴下によつてそれが廣くなりますように。又それは壊れてもゐますから、建て直して戴きます。そこにはお目障りになるものが澤山山々あります。私はそれを知つてをり、又告白致します。けれど誰がそれを掃除致しませう。或は貴下より外、誰に向ひ叫びませう。お主よ、私の隠れた罪を潔めて下さい、知らぬ罪から貴下の下僕をお救ひ下さい。私は信じてゐるが故に語るのです。お主よ、私が自分に反對して自分の罪を告白したことは、御存じでゐます、私の神よ、そして貴下は私の胸の不信を除き給ふたではありませんか。私は眞理に在す貴下と議論は致しません、又私の不義が、それ自身の偽證をする恐れがありますから、私は自分

を欺かうと致しません。私は貴下とは是非を争ひません。何せなれば、主よ、主よ、若し貴下が不義を照覽ましまさば、誰か克く支へることが出来ませう。

## 六 嬰兒と神の永遠

けれどもお恵みの前に私が訴へるのをお許し下さい、埃と灰とに過ぎない私の如きものでしても。なほ一度私に言はして下さい、私か話をしますのは貴下の御憐愍に對してするので、私を嘲ける人間に對しては無いのですから。それは貴下だつても私をお嗤ひなさいます、それでも貴下は振り返つて、憐んで下さいます。主なる私の神よ、私は只斯うより外言へません——「私は此死んでゐる生命に(私はさう稱びませう)或は生きてゐる死に何處から來たものか知らない」と。私は知らんです。只私は貴下の憐みの慰めに力づけられたことを私の肉の父母に聞かされました。(私自分では覺えの無いことですから) 貴下は父から、又母のうちに、或る時私を形造り給ふたのです。ですから、先づ人の乳の慰め

が私に與へられました。けれども母も又乳母達も自らその乳房を満たしたのではなくて、主よ、あなた自らの機構と、萬物の根元にまでも頒ち給ふ貴下の富により、母や乳母等を通して、嬰兒の食物を私に與へ給ふたのです。又貴下が與へ給ふたよりも多くを望まないように私に過分に與へず、貴下から受けたものを喜んで私に與へる心を、私の乳母達に授け給ひました。何ぜかなれば乳母達は、貴下から潤澤に戴いた分を喜んで頒けたのですからそれは私が彼等から受けた恵みは、彼等に取つても恵みであつたからです。けれどもそれは彼等から來たものではなくて、彼等を介して來たものです。なぜなれば總ての善い事は、お、神よ、貴下から出て、又私の神から私の健康も來たのですから。又後、貴下が内からも外からも私に賦與し給ふた性質の本能を通して貴下が私に御叫びなされたとき、私は之をさとりました。當時は先づ乳を吸ふことを知り、私を悦ばすものに満足し、私の肉を苛立たせるものに泣いただけでした。

その後私は又笑ひ始めました。先づ眠り、それから醒めました。私は自分の事を斯う告

けられました。すると容易にそれを信じたのです。他の嬰兒がさうすることを私共は見えてをるのですから。私は自分に關した斯麼ことを記憶してをりません。すると奈何です、少し宛私は自分の居る所を悟り出したのです。又自分は何が欲しいのかを、私に取つてくれる人々に知らせる望みを起しました。けれども私はなほ未だ充分には私の望みを彼等に言ひ表はすことは出来なかつたのです。望みは内にあり、人々は外にあつたからです。又彼等もその何れの官能によつても私の魂に入ることは出来なかつたのです。だから私は手足をばた／＼させ、又出来る限り私の慾望に似寄つた他の若干の合圖をしながら、幾らかの言葉を出したのです。それでも此合圖は慾望には似てゐないものでした。そして人々が私に従はないか、成は私の意志が彼等に解らないか、又は聽かれなかつた時には、私は自分に従はなかつた年長者、又は私に奴隸的奉仕を肯んじなかつた自由人に立腹して、泣いて復讐しました。嬰兒は斯るものであることを、私は嬰兒を見て知りました。私も亦斯の通りであつたことを、それを知つてゐる私の乳母達よりも、知らない嬰兒が、却つて克く私

に教へました。

然るに今は奈何です、私の嬰兒時代は疾くに去りましたが、私は未だ生きてをります。然し主よ貴下は、永久に生き給ひ、且つ貴下にあれば何物も死にません。何ぜかなれば、世界の始まる以前、又以前と稱び得られる總ての物より以前に貴下は在し、御手に創られし萬物の神にして、且つ主におわしましたのです。貴下のうちには、過ぎ去る萬物の原因と、變化する萬事の常住な起原と、不合理で、一時的な萬有の、永遠にして、且つ生きてゐる理智とが嚴存致します。神よ、語つて下さい、貴下の祈願者に語つて下さい、憐れに思召して、貴下の哀れな下僕に語つて下さい、私に仰言つて下さい、私の神よ、私の嬰兒時代は、既に過ぎた或る時代に續いたもので、その前代といふのは私が母の胎内で過ぎたものでせうか。私はそれに就いて或る證據を持ち、又自らも妊娠してゐる女を見たのです。けれども此時期以前、神よ、私の喜びよ、私は何處に在つて、何でありましたらうか誰か私に答へることが出来ませう。誰もありません。父も、母も、他の者の經驗も、又私

の記憶も、貴下は斯る質問の爲めに私を嘲りはなさいませんか、貴下を讚美し、又私の知るものについて貴下に讚美し、又懺悔することを命じ給ふ貴下は。天地の主よ、私は貴下を讚美し、又私の記憶しない私の前生と、私の嬰兒時代とに關して貴下に讚美を捧げますけれども貴下は他人にあることを見て、自分の身にかゝることを人に推測せしめ、小さな女の信仰により、人自らに關する多くの事を信ぜしめ給ひます。其時ですら私はもう存在し、又生きてゐました、そして既に嬰兒時代の終りに於て、或る合圖によつて他人に私の思ひを表はさうと致しました。斯る動物は、主よ、貴下からでなくして、誰から参りませう、又誰か自分の創造者であり得ませう。或は貴下の御拵へなされたもの以外、他のものから出て、私共のうちに存在と生命を流入する脈がありますか。お、主よ、貴下にあつては存在と生命とは別物ではありません、何ぜかなれば至高の存在、至高の生命は、即ち貴下御自身だからです。貴下は最も高く、又變り給ひません。又今日の日は貴下にあつて過ぎ去らず、或は貴下に於て過ぎ去ります。何ぜかなれば、此「時」すらも皆貴下のうちに

あり、貴下が保有なさらねば、何物も過ぎ去る道をもたないのです。又貴下の「歲月」は乏しくなることがなく、無盡藏なので、貴下のお齡はいつも今日です。私共の日、私共先祖の日がどれだけ此今日を通つて過去となり、又それに依て彼等の存在の様式と限定とを受けましたらう。又他のものも矢張りそれから存在の様式と限定とを受けて過ぎ去るでせう。然し貴下自らはお變りなさいません。あらゆる明日と、又その先、あらゆる昨日と又その後を、貴下は貴下の今日爲さんとして、今日爲し給ふたのです。誰も此事を知らずとも、私にとつて何でありませう。こんな者は喜んで言ふがい、です——「是は何だ」と。其者は喜ぶがい、のです。それと一緒に在す貴下を見付けようとししないで、それを見付けることよりも、寧ろそれを見付けまいとして、見付けることを好ませて下さい。

## 七 嬰兒も罪人

お聞き下さい、神よ、悲しいのは人類の罪でういます。人は是を言ひますとき、貴下は

人を憐み給ひます。貴下は人を創り給ひましたが、彼のうちに罪を造りはし給はなかつたのです。嬰兒時代の罪を私におほえさせる者は誰ですか。貴下の眼前には何人もその罪から潔い者はういません、地上に未だ僅か一日の生命をもつばかりの嬰兒ですらも潔くはありません。誰か此事を私に心づけますか。私自身を思ひ出させるものは、現に私が見る幼児ではありませんか。それでは私は何で罪を犯しましたか。乳房を貪り、泣き叫んだことですか。尤も若し私が今よしや乳房に對してはなくても、年齢相等の食物に對して貪り泣き叫んだとしたなら、私は嘲られ、又排斥せられるでせう。だからその時ですらも、斯の泣くことにより私は何か非難せらるべき程の事をしたことになりましたが、私を護る者の心を推察し得なかつたので、習慣も理性も私を護しなかつたのです。なぜかなれば私共は成長すれば、斯る小兒の習慣を根こそぎにして、棄て去るからであります。又私は、賢い人であるなら、何物かを潔める時、それと共に善いものを棄て去るのを見たことがあります。或は、若し與へられたら、有害なものを泣き叫んで求め、聽かれたら、自分の身

を亡ぼすやうな命令を聞かれなかつたとて、自分の機嫌の善いようにしなかつた自由人や年長者達や、生みの親や、其他自分よりも賢い人々が、私の意志に奴隸的の服従をしなかつたと云つて、力の限り強請したことは、たとへ一時ではあつても、善いことでしたらうか。だから無垢は嬰兒の肢體の弱さにあつて、その魂にあるのでは無い。私は幼児の妬むを見て知つてをります。それが未だ物も言へないのに、自分の乳を他の兒が呑んだといつて、どんなに蒼白くなつて、恨めしさうに眺めましたでせう。

誰か此事を知らないでせう。母親や乳母達は何だか分らない薬で、斯麼ものを宥めるといひます。けれども充分に養はれてゐる嬰兒が哀れな兒に豊かに溢れる乳の泉を願けることをきかないのは、罪が無いと言へませうか。此あはれな兒は切に之を要し、又只それだけで生命をつないでゐるのではありませんか。けれども私共が愛を以て之を許るして置くのは、罪がないからといふのではなく、只年をとると共に之は無くなるからです。何せかなれば、若し同様の罪が成年の人にあることが分れば、貴下が看過なさらぬことによつて

明かであります。ですから神よ、主たる私の神よ、私の嬰兒時代に生命と共に、現に見る如き諸種の官能をそなへ、四肢をと、のへ、形を美にし、且つ一般の善と安全の爲に、あらゆる手段を與へ給ふた神よ、貴下は斯うした事の爲めに貴下を褒め、貴下の御名に歌ふことを命じ給ひます、いと高い方よ。よしや貴下は是等のもの以外に何もなさらなかつたにしても、貴下は全能で、善い神に在すのです。なぜなれば、是等の事は誰もすることが出来ず、只貴下だけが出来るのですから。貴下は只一人在し、貴下から總ての様式は出て参ります。絶対の美よ、貴下は萬物に形を與へ、萬有をその法則で支配なさいます。

ですから、主よ、私の記憶にない私の生涯の此時代、私が他の者に聞いて信じなければならぬ上に、自分で過ごしながらも、他の小兒達に見て推測するより外仕方のない此時代は、たとへ斯うした諸々の證據は、非常によく私の推測の當つてゐることを保證したところ、私は自分が此世に送る生活のうち之を加へることを好みません。それが忘却の闇に置かれてゐることは丁度、私が母の胎内に過したと同様だからでゐますから。けれ



ども若し私が不義でつぐられ、罪に於て母が私を孕んだものとするれば、私の神よ、何處で貴下の下僕たる私は、主よ、何處で、又何時無垢でしたらう。けれども照覽まします、今私はその時代を省略してしまひます。何の痕跡をも想起し得られないそんな時代のことが私に何の關係かムいませう。

## 八 少年時代

嬰兒の時代から引續いて私は少年時代に入らなかつたでせうか。或は寧ろ少年時代が私に來て、私の嬰兒時代に續いたのではありませんか。けれども未だ嬰兒時代は去つたのではなかつたのでせうか、何ぜかなれば何處にそれは行つたでせうか分りません、それでも矢張り無いことは事實だつたのです。即ち私は物の言へない嬰兒ではなくて、既に物の言へる少年であつたのです。その事ならよく記憶してゐますし、又その後どうして語ることを學んだかを觀察しました。それは私の年長者達が、後は文字を教へたと同じく、或る教

則によつて言葉を私に教へましたからでムいます。けれども、神よ、貴下が私に下さつたその心により、私は呻めいたり、様々の聲を出したり、様々の身の舉動をもつて、私の慾望が聽かれるように、私自らの胸中の偽りを表はさうと努めました。けれども私のもちたもの一切も、又私の欲するものもあらゆる合圖を以てしても私はそれを表はし得なかつたのでムいます。そこで私はつく／＼と記憶をたどり、人々か何かを名指し、その物の方へ彼等の身體を動かした時、私はそれを觀察し、それを綜合して、人々がその時に言つた語は、即ち彼等が私に示したその物の名であつたことを識りました。又人々が、是とか、あれとかいつてゐるものは、萬國民の自然の言語ともいふべき、身振りによつて私に示されたのでムいます。此自然の言語は顔色、眼付、その他の部分の働き、聲音で、慾求し、享樂し、拒絶し、或は何かを避ける心の作用をあらはすのでムいます。斯うして様々な文句に、適當な箇所にかかれて、屢々繰返される言葉を、少し宛寄せ集めて、私はそれが何の記號であるかを知り、私の口を發音に従はせ、それによつて私は自分の意味を發表致し

ました。斯うして私は皆と言葉を交はし、私の慾求を傳へ、親の權威に縋り、長上の引廻しによつて、人事の煩ららしい社會へ突入しました。

## 九 嫌ひな學業と好きな遊び

神よ私の神よ、私が、未だ小兒であるものから、立身出世を爲し、人世の名譽と、虚しい富とを得させる雄辯術に達する爲め教師の人達に、服従を強いられたとき、私はどんなに慘めで、又どんなに嘲弄を味ひましたでせう。次いで學問をする爲め學校に送られましたが、あはれな話です、私はそれが何の役に立つものかをよく分りませんでした。しかも學問を少し怠ければ、直ぐに打たれました。私共の親達はその處置を善いことだと思つてゐたからでムいます。又私共よりも先きと同じ道を通つた人々は、私共がそれに跟いて來るようにと、此困難な路に標をつけて行つたのでムいます。斯うしてアダムの子息等に勞苦と悲しみとが増されました。

けれども私共は、主よ、或る人々が貴下に祈るのを見て、私共が了解し得る限り考へて貴下は偉大な方で、私共の官能にこそ現はれ給ひませんが、私共に聴き、私共を助けることの出来る御方であることを、その人々から學びました。そこで未だ少年の私は、私の助け、私の避難所たる貴下に祈りを始め、又祈ることにより、私の舌の桎梏を破りました。小さいながらも、私は學校で打たれないやうにと、小さからぬ熱心を以て貴下に祈りました。而して貴下が聴き給はなかつた時（その爲めに私を愚なものと爲し給ふたのではなく）私が當時一番大きな、且つ一番悲しい患難と思つた懲罰は、年長者達によつて、否私に何の害も起ることを欲しなかつた兩親によつてさへも嘲笑せられました。お、主よ、斯くも強い愛着を以て貴下に縋り付く大きな魂をもつ人がムいませうか。私は申します、誰か（愚鈍な者でもそれ程の事をやりは致します）熱心に貴下に訴えながら、拷問架、鞭其他様々の懲罰（それは世界一般の人々が大きな恐怖を以て免れようと貴下に祈るところの）を輕ろんじ得るでムいませうか。私共の兩親が、私共生徒が教師達から受けた是等の苛

責を笑つたやうに、それを甚しく恐れる者共を嘲けることの出来る人がいますか。私共も答を恐れないのでもなければ、他の者よりもそれを免れようと、祈りの熱心が足らぬのでもなかつたのでいます。それ程恐れながら、私共は讀書にも、習字にも、又課業のこゝとを考へるにも、要求されたよりも僅かにして、餘りに多く遊戯に耽りました。私共は、主よ、年の割には豊かに貴下が下さつた記憶も又才能も欲しくはなくて、私共の心は、その爲めに、自分でも忘れてゐる教師達にさへも打たれながら、矢張り遊戯に傾いて行きました。然し年長者達の遊情は職務と呼ばれ、小兒達が同様なことをすれば、その遊情の當人がそれを罰するのでいました、けれども誰も、小兒も大人も、或は兩方とも憐むものはありません。多分或る公正な批判者は、私が小兒のくせに毬で遊んだ爲めに答たれたのは、當り前だといふでいます、何せかと云へば、私が大人になつた時、そのお陰で一層不都合な馬鹿をする爲めの私の學問を、その遊びによつて妨けたからでいます。それとも私を打つ教師はそんなことをしないでいますか。その教師は何かつまらぬ問題で

他の教師に負かされると、私がテニスの競技で仲間打負かされた時にするよりも、もつとひどく怒つて、相手を怨むのではいませんか。

## 十 遊戯に熱して兩親の戒を忘る

けれども私は罪を犯しました。主なる私の神、自然の創造者で、又司法者、罪については只司法者である主よ、私の神よ、私は兩親と、是等教師の戒めに背き罪を犯しました。何ぜかなれば、彼等が何の目的でさうしたらうとも、私に達成せしめようと彼等が欲した私の學問を、私は後になつて善用し得たでいますから。然るに私が彼等に従はなかつたのは、一層善い道を選ばうと思つたからではなく、只徒に遊び度いばかり、あらゆる遊戯で大將になり、私の耳をつまらぬ作り話で操ぐり、一層烈しくこれを刺激せんと欲したからでいます。同様に仕方のない好奇心が眼からも光つて、大人達の行く見世物や、遊戯に向ひました。その業わざをする人達は、殆んど總ての觀客が、自分等の子供もそんなもの

にしたいと思ふ程、その業によつて多くの名譽を得るのでムいました。それにもかゝらず、若し斯る遊戯によつて勉學が妨げらるれば、悦んで打たれました。しかも彼等は勉學によつて他日其子を同様なものに仕上げようと願つてゐたのではムいせんか。主よ、あはれみて是等のことを見、今貴下をお呼びする私共を救ひ出して下さい。また未だ貴下を呼ばない者をも救ひ出して下さいませ。それは其者共が貴下をお呼び申し、貴下がその者共を救ひ出して下さるようにとお願い申すからでムいます。

## 十一 大患と洗禮の延期

けれども既に少年の時から、私は、私共の傲慢であるが爲めに、降臨しました主なる私共の神が謙遜によつて私共に約束し給ふた永遠の生命のことを聞いてゐました。又非常に貴下に信頼した私の母の胎内から、既に十字の記號をしるされ、御子の鹽に味つけられました。(マタイ傳第 五章廿三節) 主よ、私が少年の折、或る日突然胃が苦しくて、殆んど死ぬところ

であつたのを貴下は御存じでムいます。私の神よ、貴下はその時既に私の守護者に在したので、私は母及び私共總ての母である貴下の教會(加拉太書 四の廿六)の熱烈な信仰に動かされ、どれだけの熱心と信仰とを以て主なる私の神、貴下のキリストの洗禮を受けようと願つたかは御存じでムいます。そこで潔い心で貴下を信仰し、私が永遠の救ひを生む爲めに、悦んで苦しんでゐた私の肉の母は、取り急ぎ、若し私が直ぐに恢復しないならば、私は先づ貴下、主イエスよ、貴下に告白して罪の赦しを願ひ、貴下の善い聖餐を受けて、洗ひ潔められるように準備致しました。私が恢復しますと、洗禮は延期されました。若し私が更に永く生きてゐるなら、私は未だく汚されねばならないもの、やうに、延期されたのでムいました。何ぜかなれば洗禮の後に犯す罪の汚れは、その前のよりも一層大きく、且つ危険だからでムいます。斯うして私も、母も、全家一同も信じました、只父だけは別でムいました。それでも、自分は未だ信じないながらも、母が私にキリストを信するようになり、力を振ふことを妨げは致しませんでした。何ぜかなれば母は父よりも、寧ろ私の神よ、貴

下を私の父としようと努めたからでムいます。又此事で貴下は母が良人に打ち克つように助け給ふたからでもムいます。母は父よりもまさつてをりましたが、矢張りそれに従つてをりました。しかしさうしたのは貴下の御命令に従つたのでムいます。

おゝ私の神よ、若し御意に適ひますなら、何の爲めに斯う私の洗禮が延期されたか知り度いと存じます。又恰もその爲めに罪の手綱が弛るめられたやうに感じられるのは私に取つて善かつたのでしたらうか、それとも事實は弛るめられたのではなかつたのでせうか。それならば今なほ八方から次のやうな音が轟しく私の耳を撲つてくるのは何故でムいますか——「抛つて置け、あいつに何でもさせて置け。あいつは未だ洗禮を受けてゐないのだから」と。けれども肉體の健康については——「もつとひどく怪我をさせろ、あいつは未だ癒つてゐないのだから」とは申しませんのでムいます。ですから直ぐに癒やされて、私の友人や私自身の勉勵により、私の魂に健康を恢復せしめ給ふた貴下の保護の下に置かれたなら、それはどんなに善かつたでムいませう。眞個、遂によかつたにちがひはムいませ

ん。けれども、どれ程多く、又どんなに烈しい誘惑の浪が、私の少年時代の後に、私を脅かしたでムいませう。私の母は之をよく知つてをります、それで母は、聖なる像（「神其像を造り給へ」創世記）よりも、寧ろ私が後に新らたに鑄込まれる鑄形の粘土を其誘惑の浪にまかせようと欲しました。

## 十二 學問を強いらる

けれども青年時代よりも私に餘り恐れられなかつた此少年時代に、私は本を好まず、それを強いられることを嫌ひました。それでも私は強いられました。尤もそれは私にとつてよい事でムいましたが、私はそれをよくは致しませんでした。私は強いられねば、決して私の學問をしよとは致しませんでした。尤も誰も自分の意志に反して善くは致しません、よしやそれが自分にとつて善い事であつても。又私を強いた人々もそれを善く致しません。只私の神よ、私に善い事をしたのは貴下だけでムいました。何せなれば、私に學問を

強いた人々は、富める乞食心と、恥づべき榮譽の飽くなき慾望を満足せしめるのでなければ、それを何に應用していゝか解らなかつたので△います。けれどもその眼には私共の髪の毛の數すらも算へられる貴下は、私に學問を強制した者共總ての共通な謬りを轉じて、私自身の利益となし、學問を欲しない私の過ちを私の懲罰に轉用し給ひました。その懲罰は、當時小さな兒童で、又大きな罪人であつた私に決してそぐはぬものでは△いません。斯うして貴下は善くしなかつた人々によつて、私の爲めによくして下され、私の罪によつて、正しく私を罰し給ひました。それは貴下は常軌を逸した人間の慾情は、人間自らの罰となるやうに定め給ふて、その通り實行なされていらつしやるから△います。

### 十三 荒唐無稽の古典

然し私が少年の折に教へられた希臘語を何ぞ嫌つたか未だに解りません。羅典語は私は大好きで△いました。それも文法家が授けるものでなく、文學者が授けるものが好きで△

いました。(即ち文典ではなく文學が好きだつた)と申しますのは読み書き、算へる初歩の諸學課は、希臘語にも劣らぬ厄介物、又懲罰と思つたから△います。けれども斯る好悪は此世の罪と虚榮とからでなくて、何處から來ませうか。何となれば私は肉であつた、一度過ぎては、又來ない風に過ぎないから△います。それは勿論此小學の學課は、私が書いてあるものを讀み、自分の欲するものを書くだけの技術を私に授けたし、又現に授かつてもゐるので△いますから、私は自分の漂浪は忘れながら、知りもしないエーネアスの漂浪を暗記さゝれたり、或は又、お、神よ私の生命よ、哀れな私が貴下に對する愛の無いところから、死にかけてゐる自分に向つては涙も眼に溜めないにも拘らず、却つて戀に自殺したデイドの死を悲しまされたりする羅典文學などよりは優つてをりました。

けれども自分を憐まぬ情ない者よりもつと慘めなものがありませうか、即ち、エーネアスを戀して死んだデイドに向ひ涙を注ぎながら、貴下を愛しないで自分を哭かない人間より以上慘めな者がありますか。お、神よ、私の魂の光りよ、私の魂と、私の胸とを結ぶ最

も丈夫な絲よ。私は貴下を愛しませんでした。又貴下に反いて姦淫を行ひました、然るに傍の者は「克くやつた、克くやつた」と囃し立てました。然し此世を愛することは神に對する姦淫で△います。然るに精神的の姦淫者は、人がさうをしないのを恥と思ふ程盛んに喝采し、獎勵するので△います。けれども私は之を哭きは致しませんでした。却つて劍に伏して死んでデイドを私は泣くように仕向けられたので△います。私自らは、貴下を棄てる貴下の此いやしい者のあとを躡ひ、自ら土でありながら土へと急ぎました。然し若し斯様なつまらぬものを讀むことを禁じられたら、私を悲しませるものを讀めないのです、どんなに悲しんで△いませう。斯る馬鹿けたことが推稱すべきものと尊ばれ、讀み書きする學問よりも美しい學問が尊ばれので△います。

然し、私の神よ、今私の魂に叫んで下さいませ——「さうではない、さうではない。前に言つた方(讀み書きの小學の學問)がすつと善い學問だぞ」と。何せなれば、私は讀み書きよりも、遙か容易にエーネアスの漂泊や、その他のつまらぬことを忘れてしまふからで△います。

眞個で△います。小學校の入口には帷が掛けてあることは。けれども之は尊い奥義を蔽ふものではなくて、誤謬の看板に過ぎません。今は私が恐れもしないその小學の教師達をして、私を叱らせないで下さい。然し、私の神よ、私は告白致します、何を私の魂が憚ぶかを。又貴下の善い道を愛する爲めに、私自らの惡るい道を安心して排斥することを。どうぞ是等文法の賣買者をして、私に向ひ叫ばせないで下さい。若し私が、詩人の言ふのが本當で、エーネアスは嘗てカルターゴ來たのかと彼等に訊くなら、無學な者は知らないと答へませうし、學んだものは、それは本當ではないと否定させよう。けれども若し私が、エーネアスの名はどんな文字で書かれてあるかと訊くなら、それ位のことを學んだ者なら誰でも、便宜上人々の間に約束せられてゐる符號を正しく言ふでせう。そこで再び、私は伺ひますが、讀み書きと、それとも詩的物語と、どちらを忘れた方が人生により、少く損害を與へませうか。白痴狂者ならざる限り何と答へるかを誰が知らないでをりませう。ですか。私は小兒の時、此無益なものを、有益なものよりも餘計に愛して、といふよりも寧ろ是

を嫌ひ、彼を愛して罪を犯しました。けれども當時は「一に一足すの二」「二に二足すの四」は私にとつては實に耳障りな歌でムいました。けれども武士の一杯に入った木馬(ザアのエアネアスの中にあ)、トロイの焼打、クレウサ(エアネアスの妻)の亡靈などはつまらぬもの、うちで最も面白い観物でした。

#### 十四 希臘語と羅典語

けれども何せ當時私は此の様なことを歌ふ希臘文學を嫌つたのでせうか。ホーマーも矢張り斯麼話を巧みに拵へて、最も面白い下らぬものでしたのに、少年の私にはひどくいやだつたのです。私は信じます、私がホーマーを學ばされたやうに強いられたら、希臘の小兒に取つてヴァジルは矢張り同じ事でしたらう。眞の困難、別言すれば外國語を學習する困難は、丁度ギリシヤ寓話の甘いところへ、膽汁を注ぎかけたやうなものでした。私はその一語をも知らないのに、無暗に脅し付け、懲罰を加へ、無理強いに學ばされたのです。

又羅典語とて、一つも知らない幼兒の時代がありましたけれど、私は何の苛責も受けしないで、乳母達の他愛ない事を私に話す間に、笑つて、面白い話をして呉れる人々や、私と遊んでくれる遊びによつてそれを拾得したのでムいます。ですからまったく何の恐怖も呵責もなくして之を學びました。私の心がひとりでに、その思ふことを言ひ表らはさしたので、是は、私が様々の言葉——と言つて、教師が教へてくれる言葉ではなく、先方が私に打解けて話して呉れ、ば、私の方でも又自分の思つてゐるまゝを口に出して語り合ふ人々の言葉を學ばなかつたなら(會話によつて習得したので)、逆も出来なかつたことでムいます。だから語學といふものは、自由な好奇心の方が、他から加へられる壓迫よりも有力なことが充分かでムいます。けれども神よ、此力は貴下の掟によつて、自由の奔放を拘束致します。その貴下の掟は、教師の鞭から殉教者の試煉に至るまで、健全な苦味をもつてゐて私共を貴下から誘ひ出す疫病的快樂から、再びみ許へ呼び戻すものでムいます。



## 十五 神の愛を祈る

主よ、私の願をお聴き下さい、貴下の矯正の下に私の魂を沮喪させないで下さい。又貴下が私の最も悪い路から私を救ひ出して下さつたそのみ恵みに私が告白する元氣を失はせいで下さい。それは、私が今まで従つて来たあらゆる誘ひから超脱して、貴下が私に對して一層快きものとなり給ふ爲め、又全然貴下を愛して、私の心の全力をあけて貴下に取り縋り、遂には誘惑のあらゆる危険から貴下が私を引き出して下さるようにならうといふのであります。

主よ、私の王、私の神よ、何卒私が少年時代に學んだものを御用に立て、下さい。即ち私が語り、書き、読み、或は算へるものなど何でも總て貴下の御用に御使ひ下さい。私がつまらぬものを習つたときには、貴下は私を懲戒なさいました。しかもその事を娛みとした罪は赦し給ひました。以上のもの、研究で私は多く有用な言葉を學びました、けれども

そんなものは、それほどつまらなくは無研究に於ても、亦學ぶことが出来た筈ですし、又それこそ小兒の行くべき最も安全の道でございました。

## 十六 荒唐な話の害毒

然し難すべき、滔々たる世の風潮よ、誰かお前を押止めやう。お前は何時までエゾの息子達を躓かせて、木の上に乗つた人すらも之を乗り切ることがやつと出来た程な、巨きく、恐ろしい海に巻き込むのか。(木は十字架のこと、それに乗る人は殉教者)私はお前のうちに、或る時は雷鳴し、或る時には姦淫するヂュピターのことを讀まないか。けれども一人で斯う兩方を兼ねることは出来ないものである。事實は、雷霆の作り話に托つて、本當の姦淫の眞似を許るさうとするのである。けれども私共の長袖の教授共のうち誰か、自分等と同じ校舎の埃りの中から出て来た者が「是はホーマーの作つたので、人間の事を神々に移したのである。けれども自分は寧ろ神々の性質を人間に持たして欲しかつた」と叫んだからとて、それに耳を傾

けるだらうか。けれども本當に之をホーマーが造つた、又神々の性質を恥づかしい人間に  
附與して、恥も恥でないようにして、誰でも同様なことをする者は、墮落した人間を眞似  
るのではなくて、天上の神々を眞似るのだと思はせようとする作り設けたものである。

尙又、お、地獄の河よ、人の子等はお前の中に投げ込まれ、金を拂つて、斯麼作り話を  
習らはされる。そして公會に於て、學生の支拂ふ謝金以上に斯金の收入を許す法律の下に、  
公々然之を演述する時には大仰なものである。しかもお前は其の巖々に當つて、激し、吼  
えて言ふ「此處で言葉が學ばれる。此處で雄辯が修得し得られる。こゝで意志を表明し、  
最も必要な辯舌が得られる」と。それではまるで、ヂュピターが黄金の驟雨となつて、自  
分が誘惑せんとする女、ダナエの膝に降つたといふ話を描いた繪を見て、ヂュピターを自  
分の姦淫の模範にした猥褻な若者を舞臺に上げなかつたらうか。「黄金の驟雨」「膝」「欺き」  
「天の宮居」等の辭を私達は決して知らなかつたらうか。見よ、如何に此若者が肉慾に興  
奮するかを、まるで神の權威を身に受けてさうするかのやうではないか。

譯者註、テレンス即ちテレンチウスは羅馬の喜劇作家の名である。彼はヂュピターがアグリシアス  
王の女ダナエに懸想し、その幽閉されてゐる銅の塔に、黄金の雨となつて降り、メルシユースを生  
ましたといふ神話の描畫を見てゐる青年を自分の作中に取り入れたことを此處では指してゐる。

此若者は言つた――

「して如何なる神かと、彼は言ふ。

いとも高き天の宮居をその雷にて震はすは

又我、人は斯ることを爲し得じとや。

我は爲せしぞ、喜びて爲せしぞ。」

決して、此汚穢な事によつてそんな言葉を學ぶのは便利でない、却つて此等の言葉に  
よつて、汚穢が安心して爲されるだけである。私は斯る言葉そのものを非難するのではな  
い、言葉は言は、貴い器である。けれども其器に入つてゐる、酔ひしれた教師達に依て私  
共に飲まされる葡萄酒がいけないといふのである。しかも私共もそれを飲まないならば

私共は答を喰はされて、之を訴えやうにも素面の裁判者を得ることが出来なかつたのだ。  
お、私の神よ、今み前にをればこそ、想ひ起しても安全でムいます、私は不幸にも斯る物を、大喜びで、進んで勉強し、そのお陰で、之は前途有望の男兒であると言はれました。

## 十七 教育の無効

お、私の神よ、貴下の恩賜であつた私の才智と、又それをどんな馬鹿けたふう<sup>しや</sup>に費したかを語りして下さい。私の魂にとつて、非常に面倒臭い問題が私に課されました。それは御褒美か、或は恥と答かといふ條件が附いてをりました。たとへば、トロヤ王を伊多利が追ひ出し得なかつたことを怒り、且つ悲しむデュノ(前記の雷神ヂュピターの妻に當る羅馬の女神)の言葉を復讐せよといふやうなのが課題でムいました。しかも實際ヂュノはそんなことを言はなかつたと私は聞いてをります。けれども私共は此詩的な物語の足跡を踏み迷はされて、詩人(ザルのことで、以上は其著)が律語で書いたところを散文で書かれてあつたのでした。また描かれ

てゐる人物の尊嚴に従ひ、よくその忿怒やら嘆きやらを現らはし、最も適切な言葉で裝ふた者の言葉は最も喝采せられたのです。お、私の眞の生命、私の神よ、私の言葉が私と同じ年、同じ級の多くの者共に優つて褒られたからとて何になりませう。是は皆煙や風ではムいませんか。又私の智恵や辯舌を費す程のものも無かつたでせう。貴下の讚美は、主よ貴下の讚美は、貴下の聖書によつて、私の胸の柔かな新芽を支へてゐたのでしたらう、それでこそ斯様なつまらない些事に曳摺られて、空の鳥の汚い餌にならないで済んだのでしたらう。といふのは墮落した天使等(悪魔のこと)に献物をする道は唯一つだけよりないのではムいません。

## 十八 人の掟は守り神の法律には背く

けれども、模範として私の前に置かれた人々が、元來は悪くないその人々の或る行爲を語るのに、下卑た口をきいたとか、無作法な言ひ方をしたとか非難せらるれば、狼狽しな

がら、自分等の不仕鱈な生活を、豊富な、修飾された、態裁の善い言葉で賞揚せらるれば、それを名譽とした時代に、私がい前を離れて、斯うまで虚榮に乗せられたことが何の不思議でムいませう。「長く忍びて、憐憫と眞理とに富み給ふ主よ」貴下は之を見そなはして黙つていらつしやいます。貴下は永久に黙つていらつしやいませうか。今でも、貴下は、貴下を追ひ求め、貴下からの喜びを渴望し、「その心汝に向ひて、我汝の聖顔をたづねたり、主よ、我汝の聖顔をたづねん」(詩篇第117の第九)と云ふ魂を此恐ろしい深淵から引き出して下さいます。暗い愛慾は貴下の聖顔から私を遠ざからして居るからでムいます。貴下から離れ、又は貴下に歸るといふのは、足によつて歩むからのことでもなければ、距離があるといふのでムいませぬ。またあの若い放蕩息子(ルカ傳第15章)が遠國に行つて、出發の時貴下が御與へなされたものを皆放蕩の生活に費すのが目的で馬とか、車とか、又は見える翼を望み、或はその足を働かして旅行は致しませんでした。貴下は彼にお與へなされた時には慈愛の父に在したのですが、彼が無一物で歸つたときには、なほ更慈悲に在したのです。だ

から聖顔から眞に遠ざかるのは暗い情慾によるものです。

お、主なる神よ、御覽じませ、いつもの通りに辛棒強く御覽じませ、人の子等は如何に彼等の以前に語つた人々から受けた文章、辭句の約束を注意深く守りながら、貴下から戴いた永久の救ひの約束を無視してをるでムいませう。たとへば發音古來の法則の學習者である教師や學習者は、Homo(人間)といふとき、最初の綴りに、文法通り強勢アクセントをつけない人があつたら、人間たる其人が、貴下の御旨に反して、人間を憎んだよりもつとひどく叱りつけるのでムいます。それはまるで人は誰でもその敵は、それに對して自分が起した憎悪の念以上に悪いものだと感じ、或は怨恨により自分らの魂を傷ける以上に、自分が迫害してゐる者をひどく傷けることが出來ると想つてゐるやうでムいます、まったく良心の此法則、即ち「自ら欲しないことを他に爲す」(マタイ傳第七)章、第十一節)法則にまさる文字の眞の智識はムいませぬ。いと高いところに、無言で在す神よ、唯一人にましまして、怠らぬ法則により、不法な野望の罰として、盲目めくらと爲し給ふ神よ、人が辯舌の力を恃み、人間の審判者の

前に、多くの人により取り巻かれ、その最も猛烈な憎悪を以て、其敵に對して罵詈する時には、自分の舌が人々の前でOmnes (Homines (人)といふべき場合に)といふやうな失策しつじやくりをせまいように、最深の注意を拂ひます。けれども怒りの爲め、人を社會より放逐することを氣にかけません。

## 十九 少年の罪、大人の惡

是こそは私が不幸にも少年時代に置かれた習慣の門口でムいました。是こそ私が、破格の言ひ廻しをした場合に、それをしない者を猜むよりも、寧ろ自分が破格をすることを餘計に恐れたのでした。私の神よ、私は是を申上げて、貴下に懺悔致します。けれども其様なことで、私は仲間仲間に褒められました。彼等を悦ばすことを當時私は善いことと思つてゐました。當時私は貴下の眼を離れて投げ込まれてゐた、汚穢の渦巻く淵に氣がつかなくなつたのでムいます。貴下の眼の前に既に汚れた私よりも、もつと汚れたものがありましたか

遊びが好きで、玩具を欲しがり、芝居の眞似をしたく、そわ／＼として、無數の偽りをもつて師傅、教師兩親を欺いて、自分と同じい者にまでも嫌はれてゐる私の如き者よりも。

私は又親の審おぼやや食卓から盗みも致しました。貪慾にとらはれてか、それとも自分等も私と同じく氣に入つてゐる勝負事を私に賣る友達に、何物かを與へようといふつもりかで、そんなことをしたのでムいます。又此勝負に於て優者とならうとする慾望に打克たれて、欺偽的に克たうとも致しました。けれども私が爲てゐると同じ不正なことを、他の者がやつてゐるのを見付けた時には、どんなに私は辛棒氣がなく、又どんなに激しく喰つてかゝつたでせう。しかも自分が見付かつたら、私は承服するより、寧ろ喧嘩を致しました。是は少年の無邪氣でムいますか。ではムいませぬ、主よ、決してさうではムいませぬ。私は貴下に御慈悲を叫びます、私の神よ。私共が年をとつてから後には、師傅や教師や、栗や、雀などをすてますが、その代りに、王や、知事やに關し、又黄金、邸宅、奴隸を得ることについて、同じこと、まつたく同じ事があるのでムいます。けれども此小兒の遊びは、丁

度鞭の後に、なほ大きな罰が続くやうに、年を一層とるにつれて、以上のものに引き繼がれます。ですから私共の主<sup>に</sup>に在す貴下が「天國に在る者は斯の如き者なり」と仰言つて謙遜の表徴として嘉みし給ふたのは、只幼兒の身長が低いことを意味し給ふたまでのことであらう。

## 二十 神に恩賜を感謝す

けれども最も秀れて、最も善い、宇宙の創造者、支配者の主よ、私に只少年時代だけの生命を下さつたにしても、私は感謝致します。私はその時ですら存在し、生きてゐて、又感じてゐたのでありますもの。私の安寧に攝理が——其處から私が出て来た——神祕な統一の痕跡があつたのでありますもの。私は内部の感覺によつて、私の感覺全體を保護し、是等の小さな事に於てすら、小さな事物に關し思惟すること<sup>に</sup>に於てすら、眞理を悦んだのであります。私は欺されることを嫌ひ、旺盛な記憶を有し、辯才をそなへ、友情に慰めら

れ苦痛、卑陋、無智を避けました。斯様な小さな生物にあつて、之が不思議でなく、感嘆すべきこと<sup>で</sup>なくて何と致しませう。けれども一切は私の神の賜物であります。それを私に賦與したものは私ではありません。又そんなものは善いもので、それを一緒に集めたものが私自身なのであります。然らば私を造つた方が善いわけでありますまいか。其方は私の善なのです。其方の前に、私は自分が小兒のときにもつてゐた、あらゆる善の爲めに讚美を捧げませう。その方に於てなく、その方の創造物——自身やその他の——に於て、私が快樂、崇高、眞理を求めて、悲哀、混亂、誤謬の中に、眞逆様に陥つてしまつたのは私の罪でありました。私の悦び、私の光榮、私の信頼に在す貴下に感謝致します。私の神、貴下の恩賜に對して感謝致します。けれどもその恩賜をなほ私に鼓かして置いて下さい。そこで貴下が私を保持して下さるなら、貴下が私に下さつた物は増大せられ、完成せられ私自らは貴下と共にをりませう。なぜかなれば、私の存在は貴下の賜物なのでありますから。

## 第二篇

### 一 罪の青年

私は今自分の過去の汚穢と、私の魂の肉腐敗とを想ひ起しませう。それは私がそんなものを愛するが爲めではなく、私の神よ、貴下を愛しようといふのだからでムいます。貴下に對する愛の爲めに私はさうするのでムいます。私の最も悪いことを、非常に苦がい記憶のうちに顧みて、貴下が私に慕はしいものとなつていたゞき度いからです。いつ迄でも慕はしく、恵みあり、且つ確實な慈愛にまします神よ、貴下は放蕩を粉味塵に引き裂いて一方には、唯一にまします神よ、貴下に背いて、私が雑多なもの、うちに身を沈めてしまつたとき、私を取り纏めて下さいました。私は青年時代には、地獄の満足を得度くて、影のやうな様々の愛に狂つたのでした。自分を悦ばし、又他人の眼を悦ばさうとして、私は

貴下の眼に厭ふべきものとなり、私の美は消え失せてしまひました。

### 二 情

### 慾

又愛したり、愛されたりする以外に、私は何を愛しましたらう。けれども私は精神から精神への愛の尺度、即ち友情の境界を守らないでしまつたのです。そこで肉のどろ／＼な情慾と、青年の空想から、霧が立つ騰つて、私の胸を蔽ひ暗らまし、私は愛の晴明と情慾の霧との區別を如ることが出来ませんでした。此二つがゴチャ／＼に私の裡に煮えて、私の恒心なき青春を、不潔の斷崖の上に追ひやり、私を恥辱の淵に陥らせました。貴下の怒りは私の上に集まりましたが、私はそれを知らなかつたのでムいます。私は自分の死滅の鎖の響によつて聾になりました。之は私の魂の傲慢の罰でムいました。斯うして私は愈々貴下を遠ざかり、貴下は私にかまはないで、私は揺られ、浪費られました。私は姦淫に煮えかへり、しかも貴下は靜まりかへつてをられました。おゝ私の遅い歡喜よ、貴下は其と

き静まりかへつておいでなさいましたので、私は猶更遠く、貴下から遠く迷ひ出し、自暴自棄になつて、なほ／＼實のない悲みの種畑へ踏み入りました。

噫、誰かゝるて私の辛慘を愉快にし、是等の最新な虚榮の褪せゆく美を善用したならばよかつたでせうに！ その樂しさに制限を加へて、私の青春の潮が、よし静まらないまでも、結婚の岸に打ち上げて、主よ、貴下の掟が定めてゐるとほり、家族を造る目的のうち止まつたならばよかつたでせうに！ 主よ、貴下は斯うして、貴下の樂園から追はれた荆棘を優しい手で柔けることが出来給ふので私共の死の子孫(人間の子孫の意味)を造り給ふのでは無いませんか。貴下の大能は、私共が貴下を遠ざかつてゐる時すらも、私共から遠くにあるのでは無いと。さもなければ私は雲から出た聲に(天來の言葉 即ち聖書に)注意した筈で無いと。即ち「されど斯る者は其身苦みに遇はん。われ汝等を苦難にあはすに忍びず」(哥林多前書第七章廿八)と、又「男の女に觸れざるを善しとす」(同七)と、又「妻なき者はいかにして神を悦ばせん」と神のことを考ふ、されど婚姻せし者はいかにして妻を悦ばせん」と世のことを考ふるなり」

(同第七章第卅二、卅三)といふ是等の言葉に私は一層注意して耳を傾け、天國の分として聖別せられて、なほ大きな幸福を以て、貴下の抱擁を待ち望むべきであつたので無いと。けれども、あはれな私は、丁度荒らぶる海のやうに、私自らの潮の奔るに任かせて、貴下を棄て、あなたの限定を悉く乗り越して、泡立つたのです。それでも私は貴下の筈を免れることは出来ませんでした。どうして人間にそんなことが出来ませう。貴下は何時も私に對してお情けで嚴にして、私の不檢束な逸樂に、最も苦がい雜ぜ物をなさいました。私に雜りのない快樂を求めさせようとの思召だつたのです。けれども主よ、貴下に於ては、何處に斯様な快樂を求めることが出来ませう。貴下は悲しみに依て教へ、癒やす爲めに、私共を傷け、貴下を離れて死な、いように、私共を殺し給ふのでは無いまにか。私が肉の年十六才で、貴下の法律は許しませんけれど、人間の無恥が、それに勝手氣儘を免るしてゐる肉慾が私を支配し、私が全然それに身を任せてしまつた時、私は何處にゐましたか、又どんな處まで喜んで貴下の御家から放逐されたのでしたらう。私の友達も當時結婚によつて私の



墮落を救ふ心配をして呉れなかつたのでムいます。彼等が唯一の心配は、單に私が上手に話して、有力な辯士となることでムいました。

### 三 學業の中斷

其年私の學業は中止されました。けれどもマダウラ（隣りの市、私が文學や修辭學の原則を其處で習ひ始めたところ）から歸ると、更に遠くカルターゴに旅する費用が私の爲に用意してありました。しかもそれは、タガステの貧乏な自由民に過ぎない私の父の懐工合がゆるしたからなのではなく、寧ろ其決斷によるものでムいました。誰に私は是を話してゐるのでせうか。まつたく、私の神よ、貴下に對つてはムいません、たと貴下のみ前で私の同胞に、しかも偶々此書を読む人類の極めて僅かな部分に對つて之を言ふのでムいます。又何の爲めに私が之を言ふのでせうか。私自らと、總て之を読む者に、奈何深淵から私共は貴下を呼び求むべきかを明かに考へさせようといふのでムいます。懺悔する心と、

信仰の生活以上に、貴下の御身に近いものは何でムいませうか。又誰が私の父を褒めないものがムいませうか、自分の力に及ばぬまでも、彼はその子息の勉學の爲め、遠い旅に出る總ての必需品を整へようとしたのでムいますもの。遙かに自由のきく市民達でも、その子供の爲めに、斯麼ことは致しませんでした。けれども此父は私が貴下に對してどうなつたか、どんなに純潔であつたかは少しも心配致さなかつたのでムいます。その結果私は只辯舌に富み、貴下の畑である私の胸の、唯一の眞なる、又善い主にまします神よ、貴下に對する開拓については荒るゝがまゝに打棄てゝムいました。

けれども此十六の年、一時（怠惰の一時期が兩親の手許不如意の爲め挿まれることにムいました）學校を退いて兩親と一緒に住つてゐるうちに、不純な情慾の荆棘は私の頭に生ひ茂り、しかもそれを抜取る手がなかつたのでムいます。のみならず、私の父は、私が入浴してゐるとき、既に成熟して、逸り勝ちな青春の氣の漲る私を見て、早くも孫のことを期待して、喜んでその事を母に告げ、創造者たる貴下を忘れ、我意といふ精神的な酒に酔

ふて、貴下御自身の代りに、貴下の創造物に愛着して、岐路に入り、最も卑しい物に拜跪する官能のさやぎに喜んでゐました。けれども貴下は、既に母の心のうちに貴下の神殿とその聖き住家の建築を始め給ふたので、いいます。けれども父は未だ洗禮志願者で、その入門も極く最近のことでしたから母は敬虔な恐怖と、戦きとに、冷々してをりました。又私は未だ信仰に入りませんが、貴下に後ろを向けて、正面しない人々が行く邪道を、私が踏みはせぬか心配してをりました。

私は禍で、いいます。私の神よ、私が貴下を離れて、遠くさまよふた時でも、貴下は黙つてゐらつたと私は敢て申しませうか。本當に貴下は其時黙つてゐらつたでせうか。貴下に忠誠な私の母を通して、貴下が私の耳に唱ひ給ふたのは、み言葉でなくて何でいませう。けれどもそのうちの一言すらも充分私の心に這入つて、そのとほりにさせなかつたのでした。母は私が姦淫をせないように、殊に他人の妻を冒さないようにと、密かに私を警めたことを私は憶えてをります。斯麼ことは私には女々しいことで、それに従ふのは恥

だと思はれました。けれどもそれは貴下の御言葉であつたのに、私は知らなかつたので、いいます。で貴下は無言にましますもので、語るものは單に母だと思ひました。實際は母を通して貴下は私に對して無言ではましまさなかつたので、いいます。又私によつて、即ち彼女の子息、貴下の女中、貴下の召使の子息たる私によつて、母のうちの貴下は侮辱され給ふたのです。けれども私は知らなかつたのです、そして私に劣らぬもの共が、其大罪を誇るのを聞くとき、いや、それどころか墮落すればする程、彼等がそれを誇るのを聞いた時、私は仲間のうちでは、厚顔無恥になりやうが少ないのを、恥ぢと思ふ程目がくらんでをりました。そこで私はさうすることの面白さの爲めばかりでなく、褒められるのが嬉れしさに、そんなことを致しました。責むべきものは悪でなくて何でいませう。けれども私は非難されまいとして、實際よりも自分を悪いものに致しました。又何事にでも耽溺した者共のやうに罪を犯さなかつた場合には、私は爲ないことを爲たやうに見せかけました。無垢の爲めに卑屈と見られ、純潔の爲めに輕蔑せられたくなかつたらで、いいます。

如何でムいませう、私はどんな仲間と一緒にバビロンの街(滅亡の市 街の意味)をうろづいて、まるで肉桂や貴重な油の中にでも臥るやうに、その泥濘ぬかるみに臥轉ふかんだではムいませんか。そして私がその中心に、もつと慥り粘り付き、動きが取れないでゐるやうにと、眼に見えない敵は私を踏み付け、私が誘はれ易いものにつけ入り、私を誘惑したのでムいました。又バビロンの中心を逃れ出ても、未だその郭外を一層のろく歩るいてゐた私の肉の母も、私に純潔を忠告した程には、自分の良人から聞かされた私のことに注意して、結婚の愛情のうちをそれを制限しようとは致さなかつたのでした。尤も母は此放埒は速かに除かれてしまはれないなら、現在では悪疫のやうなもので、未來にとつて危険なものと思つてはゐるたのでムいます。母が此事を意に介しなかつたのは、妻といふものが私の出世の希望の妨げをするだらうと懸念したからでムいます。その希望とは、母が貴下のうちに置いた來世の希望ではなくて、両親ともに無暗と私に成就を懇求した學問の希望でした。父は貴下のことを少しも考へてをらず、私のことは只虚しい偽りだけを考へてゐましたし、又母は此世間

並みの學問は管に貴下に到達する妨げとならないばかりでなく、却つてその促進とすら思つてゐるのでムいます。私は出来るだけよく両親の性質を憶ひ出して斯う推測致します。それに遊びに暇を潰すことには、適當に厳しかるべき制限を越へて、手綱は弛められるどころか、放埒に流れて、様々に私を苦しめました。そして總てのものには霧がかゝつて、私の神よ、貴下の輝きを私に遮り、「私の不諱は肥え太り飛び出づる」ほどになりました。(詩篇第七 三の第七)

#### 四 盗 み

主よ、盗みは貴下の法律にも、又人の胸に書かれ、其不義を以てしても消滅させられない法律にも罰せられます。盗まれて黙つてゐる盗人はムいません。たとへ自分は物持ちの盗人であつても、貧乏なものに盗まれることを許しません。けれども私は盗まうとして、盗みました。飢じさの爲めでも、貧乏の爲めでもなく、只正義を嫌ひ、不義を欲してした

ことでした。何せなれば、私は充分に持つてゐるものを、また遙に善いものを持つてゐながら、盗みましたのですから。私共の葡萄園近くに一本の梨の樹がありました。色も味も別段によくもない實がそれに生つてをりました。之を揺り落して盗む爲め、私共の或る狡猾な若い者共が一夜遅く出掛けました。その爲め、私共の弊風に従ひ、其時間まで街道で遊ぶのを長が引かしてをりました。私共は梨をどつさり取りましたが、それは只ちよつと噛つたゞけで食べもしないで、残りは豚に投つて喰はせたのでムいます。斯處とは許されないとでしたから、愈々私達は喜んでしたのです。神よ、照覽まさせ私の胸を、それは貴下が底ない坑口の底にあるのを見て、憫み給ふたものです。今照覽まさせ、私の心は只惡そのものゝ爲めに惡を爲さうとすること以外に何にも思はず、無暗に悪いことをしよう、そこに求めてゐたことを、私の心に語らして下さい。それは汚れてをりました、私はそれを愛しました。見すく死ぬのに、愛しました。自分の過ちを愛しました。私に過つたことを愛したのではなくて、私の過ちそのものを愛しました。汚れし魂よ、耻に

よつて何物も求めはせず、耻その物を求めて、お前の蒼空から、亡滅の中に墮ちた魂よ！

## 五 原因なくして罪はない

總ての美しいものには、即ち金にも銀にも又總てのものには、魅力がムいます。身體の接觸に於ては、同情の力が甚だ強く、各々の官能はその適當な目的物にしつくりと合ふものでムいます。浮世の名譽にも又優美、征服力、支配力があつて、そこから又復讐の渴望も起ります。然し是を皆得ようとして、主よ、貴下を見棄て、又貴下の掟に反くことは許るされません。私共が暮らしてゐる生活も又、それく似合つた自らの靈たまごと此下界のあらゆる美しいものに相應するものを持つて居ります。人間の友情も又多くの魂に形造られた統一によつて、愉快な結合によつて慕はしいものとせられます。總て斯る原因又は同様なことにより罪は犯され、又最も低い階級にある是等の善に過度に傾倒するから、より善く、より高いもの、即ち貴下、私の主なる神、貴下の眞理、貴下の法律が棄てられてしま

ひます。何ぜかなれば、是等の低いものもその喜びをもつてをります。けれども萬物を造り給ふた私の神のやうではムいせん。何ぜかなれば「美しき者は彼を悦び、而して彼は心正しき者の歡喜たる」(詩篇第六)が故でムいせん。

だから私共は何ぜ犯罪があつたかを訊ねる時、何か其處に、私共が斯くの如く低い善と呼ぶものを得る慾望があつたとか、或はそれを失ふ恐れがあつたかといふふうに見えなければ、私共はそれを信じないのでムいせん。といふのは斯麼ものは、より高い、美しい善と比べては卑しく、低くはありませんが、矢張り美しく、立派だからでムいせん。一人が他を殺したと致しませう。何ぜですか、彼はその妻を愛し、その領分を欲しがつたからです。或は自分の糊口の爲め盜まうとしたのか、又はそんなものを他に取られることを心配したか、それとも、害を被つたので、怒つて復讐したかでムいませう。誰が何の原因なくて、只殺すことを楽しみに人を殺す者がありませうか。誰がそんなことを信じませう。好んで兇暴、慘忍と言はれる、悍猛、野蠻な其人にすらも斯うした理由を附せられるのです、即

ち「懶惰の爲め手又は魂の萎縮しないよう」にであります。(以上の句はカチイリナが謀反の仲リナは紀元前一〇八年に生れた、ローマの勇者である——譯者)ではそれは何の爲めですか。様々の悪業により都市を占領したとき、名譽と、權勢と富とを獲、又法律に憚るところなく、自分の家族が貧乏にて困らぬように、又自分の悪事を意識せぬようにし度いからのごとでムいせん。してみると、カチイリナ自らはその悪事を好まず、外に何か欲しいものがあつて、その爲めにそんな事をしたのでムいせん。

## 六 快樂の偽り

では、その十六才の時、お前、私の盜みよ、あはれな私は一體お前のうちに在る何を愛したのか。お前は盜みであるが故に、私にとつてお前が愛すべきものではなかつたのだ。けれども神よ、貴下は此のやうにお話するに足りるもので在るのでせうか。私共が盜んだ梨は美しうムいました。それは貴下の創造であつたからでムいせん。總てのうちに最も美

はしい貴下よ、よき神に在します貴下よ。神よ、私の主たる善、私の眞の神よ。是等の梨は美しうムいました、けれども私のあはれな魂はそれを欲しませんのでした。何ぜかなれば私はそれよりもつと善いものを持つてゐて、それでもなほ私がその梨を蒐めたのは、只盗みたいからでムいました。だから、私は蒐めたとき、それを投げ棄てました。是から受ける唯一の御馳走は私自らの罪で、私はそれを樂みに致しました。ですから若し其梨のいくらか、私の口に入つたとき、それを甘からしめるもの、それが罪であつたのです。今、主よ私の神よ、私はその盗みに於て私を悦ばしたものが何であつたかを訊ねてみますと、どうでせう、それに何の愛すべき點もなかつたのでムいます。即ち正義、智恵に於ける如き愛すべきものはムいませんでした。又心や、記憶や、官能や、人間の旺んな生命に在るやうな愛すべきものもなく、又諸の星がその軌道於て輝き、美しいと同じ美があるでもなければ、其處には脈種の充ち満ちて、その生誕によつて、死んだ者に交代する(生物あつて其處に生じ又滅す)陸や海のやうな美があるでもなく、又欺く罪惡を飾る、偽はりの、陰の如き美すら

もないのでムいます。

そこで傲慢は高尚を偽せます。けれども貴下だけが獨り萬物にまさつて高尚にあらせられます。大望——それは名譽と光榮の外に何を求めませう。然るに貴下だけが總てにまさつて名譽あり、永しなへに光榮にましますのでムいます。有力なものはその慘忍を恐れられることを悦びます。けれど神より外に誰が恐ろしいでムいませうか、神のみ力から、何が扭ち取られ、又奪ひ去られませうか、何時、何處で、何處へ、又誰によつてそんなことが出来ませう。好色者その阿諛の愛せられんことを望みます。けれども貴下の御慈愛よりも優しいものはムいません。又總てにまさつてかどやかしく、美しい貴下の眞理より以上に美しいものもムいません。好奇心は智恵を求むる心に似てをります、然し貴下は一切を知悉し給ふのでムいます。眞個、無智と愚そのものは素朴、無邪氣の名で誤魔化されてをります。何ぜかなれば貴下より以上に素朴なものはムいませんから。又罪人を害するものは罪人自らの仕業であるのに、何が無邪氣でありませう。更に怠惰は休息と呼ばれ度かつ

てをります。けれども主のお傍を措いて何處に確實な休息がありませんか。奢侈は充足又豊満と呼ばれ度いのでムいます、けれども貴下は腐さらぬ快樂の充實で、決して缺けることのない豊満に在し給ふのです。放蕩は寛大の影をみせます、けれども貴下こそは總ての善の溢れる施興者でムいます。貪慾は多くの物を持つてをります、けれども總ての物を所有し給ふは貴下でムいます。羨望は優越を主張致します、が貴下よりも優越なものが有りませうか。怒りは復讐を求めます、けれども誰か貴下よりも正しく復讐されませう。恐れは愛するものを危くする、異常、突飛なものに對して惹き起され、自分の安全を心配します。けれども貴下には何が不馴れで、突然でムいませうか、又誰か貴下の愛し給ふものから、貴下を引離しませう。又貴下と一緒になければ、何處に慥りと安んじてをられませう。悲哀はその慾望の悦びであつた物が失せたことで憔悴れます。何ぜんれば何物も貴下から取り去られないと同様、それは自分が何物をも取り去られ度くなかつたのです。

斯うして魂は貴下に反いて、貴下によらずに、純潔でないものを求め、遂に貴下に歸つ

てきますが、その時が即ちそれが姦淫を行ふのでムいます。斯うして貴下から離れて、貴下に反抗する者共は皆此通り邪しまに貴下を倣ねます。けれども斯う貴下を倣ねながらも彼等は貴下が萬物の主に在すことを公言致します。ですから彼等が全然貴下から離れ去られる場所はムいません。では彼の盗みのうちに、私は何を愛したのでムいませう。又腐つてゐても、或は邪しまにでも私が私の主を何で眞似したのでムいませう。力に因て出来なかつたので、外皮そとづはだけでも貴下の掟に違犯してゐるやうに見せかける積りでしたらうか。換言すれば囚虜の身でありながら、自分には許るされないことをしても罰は受けないこと、即ち貴下の大能を仄かに似せることにつて、不具な自由を装はふとしたのでせうか。御覽なさい、その主からのがれ、影を求めてゐる貴下の下僕を。噫腐敗よ、噫生命の變怪よ、死の深淵よ、爲したくないものを、只爲したくないといふ理由だけで、私は免るして置かれやうか。

## 七 赦免に對する感謝

何を私は主に酬るませうか、主は私に是等の物を想ひ起させ給ふのに、私の魂がそんなに驚かないように、穩かにして下さるでは無いませんか。主よ、私は貴下を慕ひ、貴下に感謝し、貴下のみ名に向つて感謝致します。貴下は私を斯麼悪い罪から解放し給ふたので、  
ムいます。貴下は私の罪を氷のやうに融き給いました。私は之を貴下の恩寵と憐憫とに歸し、  
又罪を犯かさず、済んだ一切の事も、貴下の恩寵に歸し奉ります。なほ又犯さなかつた悪業も皆貴下の恩寵と致します。罪の爲めに罪を愛しさへした私が、何をばしないで済ましたでせう。まつたく皆取り去つて戴けたと私は告白致します、私自らの熱望によつて犯した罪も、又御導きによつて犯さなかつた罪も共に。自分の弱い事を知りながら自分の貞潔と無垢とを自分の力のせいによつてする者は誰でせうか、恰もその爲めに貴下をより、少く愛してもよいかのやうに、また、貴下に御頼みする者に、貴下が赦し給ふ御憐憫は其

者に取つては左程必要ではなかつたものやうに。だから、貴下に呼ばれて、み聲に従ひ、回想し、告白してゐる私に於て、誰でも斯うした物を認めてそれを避ける者をして、此病氣に罹り、その醫者に醫やされた私を決して嘲笑させぬやうにして下さい。其者とてもその醫者の助けがあつたればこそ、病氣に罹らなかつた、といふよりも寧ろ患ひ方が少かつたのですもの。だから彼も矢張り、否、より多く貴下を愛しなければなりません。何ぜかなれば彼は、貴下によつて私がそんな罪のひどい勞症から癒やされ、同じく其醫者によつて彼自身も又同様な罪の勞症に罹らないですんだことを知つてゐるからでムいます。

## 八 盗みを楽しむ

どんな結果を私は（あはれな人間よ！）そんなものから獲たでせう。それを憶ひ出して今私は恥づるのでムいます。（羅馬書第六  
章二十一節）特に盗む爲めに私が愛したあの盗みに於て何を獲ましたらう。それも又空虚なものでした、ですからそれを愛した私は惨めだつたのです



けれども私は單獨でそれを致しませんのでした。私はそんな人間でゐました、私はそれを單獨でしなかつたことを記憶致してをります。ですから私は自分と一緒に盗みをした共謀者の協力をも愛しました。ですからまた私は窃盗そのものだけより外には何にも愛しなかつたのではなく、否、寧ろそれ以外に愛しなかつたのでゐいます、といふのは、そんな場合に協力の有無は罪の成立に取つては何物でもなかつたからでゐいます。眞個、之は何ですか。私の胸を照らし、その暗い隅々を見顯らはし給ふ御方の外、誰か私を教へられませう。一體何が私の頭に來て訊ね、論じ、考へるのでせうか。といふわけは、當時私が盗んだ梨を愛して、それを樂しまうとしたら、私は獨でそれを爲したのでせう、私の樂しみを遂げんが爲めには、只盗みをするだけで澤山ではなかつたでせうか。又是等の共犯の摩擦によつて、慾望を刺戟する必要はなかつた筈ですのに。然し私の樂しきは梨になかつたのです、それは共犯者達が犯した罪そのもの、うちにあつたのです。

## 九 共にするは樂し

では魂の此慾情は何でしたらうか。確にそれは餘りに汚れてゐたのでした。それを持つた私は悲惨なものでした。が一體それは何でしたらう。誰が自分の誤謬を理解することが出来ませう。私共は、盗んだのは私の仕業とはつゆ知らず、盗まれるれば、腹が立つてたまらない人達(梨の所有者達を意味す)を、うまく一杯喰はした時には、腹の痛くなる程笑つたのでした。ではそんなに面白いことを何せ私は獨りではなかつたのでせう。普通誰も獨りでは笑はないからでせうか。普通、誰も獨りでは笑ひまはん。けれども或る場合、其心に、何か非常に可笑しなものが現はれるときには、人は誰も自分と一緒にゐない時でも、只獨りきりで、すつかり笑はされることがあります。けれども私はそんな笑ひを獨りでしたことがありません、決して獨りで笑つたことはありません。照覽ましませ、私の神よ、私の鮮やかな回想がみ前にゐいます。私は獨りでは、決して窃盗を——私は盗んだものを悦んだの

ではなく、盗むといふことを悦んだのでムいます——致しませんでした。又單獨でなら、盗みをして面白くなかつたでせうし、盗みもしようとは思はなかつたのでムいます。噫、餘りに友達がひのない友情よ！ お前、魂の不可解な詐瞞者よ、興に乗り、氣まぐれによつて無暗に悪戯をしたがる心よ、自分の利益又は復讐を欲するのではなくて、他人の損害を冀ふ渴望よ。けれども「行かう、やらう」と言はれるとき、私共は無恥でないことを恥づるではないか。

## 十 神への躍進

誰かその捻ぢれ、纏れた結節を解き得ませう。それは汚れてをります。それを考へ、それを見ることは私は厭でムいます。總て純潔な者の眼には美しく、立派で、飽くものない満足にまします、正義と無邪氣よ、貴下と共に在つて、憩ひは始めて全く、また生命はわづらわされること<sup>二</sup>がムいませぬ。貴下に入る者は、その主人の歡喜<sup>三</sup>に入るものです。その

者は恐ることもいらす、最も善い者に於て自分も善くなるのです。私の神よ、若い日、私は貴下から、私の立場たる貴下から餘り遙かに離れ去り、自己に對して荒れ果てた國<sup>三</sup>となりました。

註——(一)主人いふ「善いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅かなる物に忠なりき、我なんぢに多くの物掌らせん、汝主人の歡喜に入れ」(マタイ傳第廿五章第廿一節)

註——(二)ルカ傳第十五章十四節、有名な放蕩兒の喻へを見よ。

## 第三篇

### 一 不純な戀愛

私はカルターゴに來ました。其處では不潔な戀の大釜が、私の周圍に沸々と音を立て、  
みました。私は未だ戀はしなかつたのですが、戀をすることを戀してゐました、そして底  
に深く潜んだ慾望により、私は自分の慾望の少ないことを嫌ひました。私は尙も愛するこ  
と愛して、何か戀すべきものを求め、安全を憎み、畏のない道を厭ひました。神よ、私の  
うちには、内面的の食糧、即ち貴下といふものについて饑饉が起つてをりました。けれど  
もその饑饉により私は飢ゑはしませんで、却つて不朽の糧に對する慾望を起さなかつたの  
です。即ち飽滿の結果慾望が起きなかつたわけではなくて、その糧が空しければ空しい程  
それを嫌つたからなのでムいます。さうなつたので私の魂は痛んで、腫物だらけになり、

あはれにも身を投げ出し、官能的物體にふれて、その腫物を搔いて貰はうとしました。け  
れどもその物體が魂をもたなければ(即ち、相手が人間でなければならぬといふ意味)、それは戀の對象とはならな  
いでせう。だから愛することも、愛せられることも私にとつては愉快であつたのでムいま  
す。けれども私が愛する人の身體を獲た時には一層愉快でムいました。私から私は友情の  
源泉を、肉慾の汚穢で潰し、その光輝を情慾の地獄を以て曇らせました。しかも斯く汚れ  
て、不正直であつた私は、甚しい虚榮をもつて、立派な、意氣な人間として通りたかつた  
のです。そこで私は愛の只中に走り込み、畏に引係らうと望みました。私の神、私の慈悲  
よ、貴下はその御現切から、どれ程澤山の苦い汁を、私の爲めにその戀の甘味に注ぎかけ  
て下さいましたらう。私は愛しられもし、又窃かに享樂の紐につながれることになりました  
た。又嫉妬、猜疑、恐怖、怒り、争鬭の燃ゆる鐵の杖で打惱まされんが爲めに、悲しみの  
紐に喜んで縛られました。

## 二 演劇の誘惑

芝居観物も亦私を惹付けてしまひました。劇の中に私の辛苦の姿や、私の情火を燃やす薪などが一ぱいにあつたのです。人は何ぜ、自分では憐みもしない、悲しい、悲劇的なもの見て、悲哀を催したいと望むものでせうか。人は観客として、さうした物に對して悲しみを抱き、しかも其悲哀が則ち愉快なのです。之が悲惨な狂氣の沙汰でなくて何でムいませう。何ぜかなれば、人は演技に動さるれば動される程、斯る感情により愈々不健全になるのです。然し、その人が自らの身で悩む時は、辛苦といふ名が付けられ、その人か他を憐む時、それは憐憫といふ名で呼ばれます。けれども此偽りの、舞台上の事件に對して起すのはどんな同情ですか。観客は助けることを要求せられるのではなく、只悲しめばいゝのです。そして観客が悲しめば悲しむ程、愈々多く其戯曲の役者を最負することになります。又若し其人物共（古代のものでも、又は單に假作のものでも）の患難が、観客に涙を流

さす程、うまく演出されなかつたら、彼は不機嫌で、非難しつゝ去るのです。然し若し彼が激情を動かさるれば、彼は熱心にとまつて、喜んで泣きます。

では涙と悲哀とは人に好まれるのでせうか。確に總ての人は喜び度いのでムいます。それでは人は辛慘を好まないけれども、憐み深いことを喜ぶからでムいませうか。あはれむことは悲しみがなくして出来ないとなので、此理由だけで悲しみが愛されるのですか。勿論是も又友情の其脈から湧き出るのでムいます。けれどもその脈管は何方へ走り、何方へ流れてゐますか。なぜそれは汚れた肉慾の恐ろしい潮を湧き出させる激湍に流れ込むのですか、何ぜそのやうな汚穢にそれは好んで變化し、態々、その裡に飛び込んで、天上の清潔を汚かされて、形を變へるのでせうか。然らば憐愍は排斥すべきものでせうか。決してそんなことはありません。悲哀は時には好ましいものでムいます。汚れをつゝしめよ、私の魂よ、私の神、私共先祖の神に在して總てにまさり、永久に賞め稱へらるべき神のお守りの下に、汚れをつゝしめ。何ぜかなれば私は今もなほ憐みをやめません、けれども當時

劇場に於いては、たとへそれが芝居であつて架空なものではあつても、戀人達が互に邪しまな歡びをしてゐる時、戀人等と共に樂み、又彼等が互に失戀したとき、私は本當に彼等に同情するやうに、彼等と共に悲しんだのです。而も劇中の人物が歡ぶもまた悲しむも等しく私には樂しみてゐました。けれども今私は、或る厭ふべき快樂を失くしたとによつて、又慘じめな幸福を失くしたことによつて、困難してゐると思はれてゐる人を憐れむより以上に、その邪曲を樂しむ者を憐れむのでゐます。是が確により眞實な憐愍でゐますが悲しみはそんな歡びを與へません。何ぜかなれば慘じめな者を悲しむ人は、其慈悲心のお蔭で憂められは致しますけれど、眞に同情する者は寧ろ悲しいとが一つも無いのを希望しますから。又、若し惡意に基つく好意といふものがあるなら（そんなものは決して有り得ないのですが）衷心から、誠實に憐れむ者は、憐れみ度いから、哀れな者があれかしと望むと云ふことになりませう。だから或る種の悲哀は結構でゐます、けれども好かれは致しません。何ぜかなれば、私共より遙かに深く魂を御愛しなさり、一層不朽に憐み深

く悲しみに傷けられない主なる神よ、貴下も亦此通りになし給ふのですから。

けれどもみぢめな私は悲しむことを愛し、悲しかるべきものを求め、例へ假作で、單に芝居の上だけに過ぎないとは云へ、他人の辛苦が、巧みに演じられる時には、私は非常に悦び、最も強烈に心を惹かれて、涙を流しました。貴下の群から迷ひ出し、貴下の監守に焦れた不幸な羊である私が、惡い病氣(心)に罹つたことは、別に怪しむに當りません。だから悲哀を愛したのでゐます。尤もそれは心の底まで泌み込むやうなものではゐませんでした、といふのは私は自分が見たがつてゐる辛苦を自分ですることは好きでなかつたからでゐます。そこで只假作の話を聞いてゐるやうな、表面だけを引搔くに止まる程淺薄な悲哀でゐました。そしてその表面には、毒をつけた爪で搔かれたやうに、腫れ、爛れ、腐れが出来きました。私の生活は斯麼ものでゐました、それが生活でゐませうか、私の神よ。

### 三 學生々活

又貴下の懇篤な御憐愍は私の上、遙かに翔つてをりました。どんなに悲しむべき不義に私は身を妻れかしましたらう！ 貴下を棄て、欺瞞の淵に私を伴れて行かうとする、冒瀆の好奇心や、私の悪行を供物に捧げた悪魔の奸策やに乗せられてしまつて！ 又そんな事の爲め貴下は私を答打ち給ひました。私は貴下の儀式が教會の壁の中に行はれてゐる間ですらも、其結果は死に相當する不都合な事を望み、又企らんでをりました。その爲め貴下は私にひどい罰を下し給ひました。尤もひどいとは言へ、それは私の答にくらべれば無いも同様なほどのものでムいました。おゝ私の過分な慈悲よ、私の神よ、恐ろしい破壊者から私の隠れるところよ。さうした破壊者の間を私は、頑然として貴下からなほ更遠ざかり自分の道を受して、貴下の道を受せず、漂浪の自由を受しました。

又推奨せられる學問も、法廷でその卓越を示すことを目的としてをりました。狡猾な者

程餘計に賞讃せられたのでムいます。之こそ自分の盲目すら誇りとする人間の盲目でムいます。扱て私は今や雄辯學校で首席となり、それを得意にして、威張り返つてをりました。尤も、主よ貴下は御存じでムいます、私は「壞亂者」(此氣味悪い、悪魔的の名はお洒落の眞の表號でありました) 其の間は伍して、彼等と同様ならぬことを、恥ならぬ恥として住ひながら、その壞亂から全然超脱して、靜にしてはゐりました。私は彼等と共に住ひ、時には彼等と交誼を悦んで結びました。が彼等の行爲を私は頗る嫌ひました。即ち彼等の「壞亂」と稱するものは、それでもつて穩なしい新入者をいぢめ、嘲り、それでいたづらな娯みの心を満足させたのでムいます。是以上に悪魔の行爲によく似たものは有り得ません。ですから彼等を「壞亂者」と稱するにまさる適當な名はムいません。先づ彼等自らが壞亂せられ、全然顛倒せられ、詭らかす悪靈に知らすく嘲られ、誘はれて、他人を嘲り、又詭らかしてゐる彼等こそ本當にさう稱ばるべきです。

#### 四 シセロの影響

是等狂氣染みた仲間に加はり、その弱年の頃、私は雄辯術の本を學び、罪すべき、風のやうな目的、即ち虚榮を悦ぶ人間の心から熱心に雄辯にならうとしました。そこで學問の常道により、私はシセロの或る本を讀むことになりました。シセロの辯舌は殆んど萬人の褒めるところでムいましたが、その心はさう褒られてはをりませんでした。彼の此本は哲學の推獎をしたものでホルテンシウスといふものでムいました。けれども此本は私の性情を變へ、主よ、私の祈りを貴下に向はせました。又私に他の目的と慾望とを與へました。あらゆる虚しい希望は直ぐに私にとつて無價値のものになりました。私は信じ難き程の熱心をもつて、智惠の不滅を冀ひ、今や、貴下に歸らうとして立ち上り始めました。當時私は十九才で、父は二年前に死んでをりましたので、母の金で雄辯を勉強してゐたのですが今はもうその爲めではなく、此本を使ひました。又この本が私を敬服したのはその文體

ではなくて、その事實でムいました。

私の神よ、當時私は如何に身を焦がしてゐましたらう、如何に地上のものを離れて、再び貴下に昇らうと焦せつてをりましたらう。しかも私を貴下はどうしようと思ひなさるかを知らなかつたのでムいます。何せかなれば智惠は貴下にこそあるのですから。けれども智惠に對する愛は希臘語でフィロソフイア (φιλοσοφία「愛」philosophia「智」の二語より成り、即ち哲學) と言ひ、それがある爲め、此本は私の熱心を高めました。自分等の誤謬を、流麗、名譽な名のもとに糊塗して、哲學といつて他を欺かうとする者がムいます。當時や又その前時代の斯るいかさま者共は、悉く此本でその面皮を引剝かれてをります。又貴下の善き、敬虔な下僕によつて明かに示された、貴下の健全な勸告「汝等心すべし、恐らくはキリストに従はずして人の傳説と此世の小學とに従ひ、人を惑はす虚しき哲學をもて汝等を奪ひ去る者あらん。それ充ち足れる徳は悉く形體をなしてキリストに宿れり」(哥林多後書第八章九節)もその中にあります。其時には(私の胸の光りよ、貴下は知ろしめします)使徒書は私の知らなかつたものでした

から、私は此教訓を獲て喜びましたが、それは只強く覺醒せられ、學派の如何ではなく、只眞理そのものならば何でも愛し、求め、獲、把持しようといふ熱心を起したので、斯くも心を燃やされながら、その中にキリストの御名のなかつたことが私の最大の歡びを妨げました。何ぜかなれば、此御名は、主よ、貴下の御恩賜おんめぐみにより、貴下の御名、私の救主の此御名は、私の幼き胸に母の乳と共に熱心に吸ひ込まれ、深く秘藏せられてゐましたので、その名がなければどれ程學ばれ、磨かれ、又は眞理であつても、どんな本も私全體をとらへることは出来なかつたのでムいます。

## 五 聖書を侮る

そこで私はどんなものかと聖書に心を傾けました。けれども、どうでせう、私は傲慢な者には理解されず、子供には開かれず、近づくに易く、達するに奥深い、神秘に包まれた物を見るのでムいます。しかも私はその中に入り、頸を曲けて、その足跡に従ふことの出

来る人間ではなかつたのでムいます。その譯は私は今話してゐるやうには、當時聖書に向つて感じなかつたからでムいます。聖書はツウリウス(マルクス・ツウリウス・キイケロシセロの事)の堂々たる様には及ばないやうに私は思つたのです。私の増長した慢心は聖書の卑近なのに尻込みして、私の鋭い智恵はその内部に貫徹することが出来なかつたのです。けれどもそれは幼児と共に育つたものでした。然し私は幼児たることを卑み、傲慢におさまり返つて、自分を偉大な人物だと思つてをりました。

## 六 マニケウス教に欺かれる

その爲め私は誇大狂で、甚しく肉的で、多辯な、その口には貴下や、聖靈や、仲保者とりなしで私共の慰め人なる、私共の主イエス・キリストのみ名の綴りを混ぜた鳥糞があつて、口に悪魔の畏をもつ人々の仲間に陥つてしまひました。こんな名は彼等の口から離れたことはなかつたけれど、只音と舌の音とを出すだけで、心には眞理がなかつたのです。それでも



彼等は「眞理々々」と叫び、盛んに眞理について私に語りました。けれどもそのうちに眞理はなかつたのです。彼等は管に、獨り眞理に在します貴下について偽りを述べたのみならず、貴下の創造物である、此世の諸要素についてすらも偽りを申しました。そこで私は本當にそれについて眞理を語つた哲學者達をすら、貴下、此上なく善で在す私の父、總ての美しい物の美に在す貴下を愛するが爲めに、棄てゝしまなければならなかつたのです。眞理よ、眞理よ、その時ですらも奈何に私の魂の眞髓は貴下に向つて、喘いだでムいませう、それはその時、彼等が屢々、又様々に、或は多くの巨大な書籍に於て、ほんの反響だけであつたけれど、貴下について私に聞かしてくれただからでムいます。そして貴下に飢ゑてゐる私に、彼等が與へた御馳走は貴下ではなくて、貴下の美しいみ業である日や月でムいました、貴下のみ業であつても、貴下御自身ではなく、否貴下の最初のみ業ですらもなかつたのでムいます。貴下の靈的のみ業は、是等具體的なみ業に先だつてあるもので、天に屬するものではありません、輝いてゐるのでムいます。けれども私は斯様な貴下のみ

業に飢ゑ渴いたのではなく、眞理に在まし「變ることもなく、又めぐる蔭もない」(雅各書七節)貴下御自身を求めたのでムいます。それなのに彼等は私の前に置いた皿に爛く幻影を盛りました。私共の眼を通してその心を欺く是等の幻影よりも、寧ろ少くも私共の眼に眞實である太陽を愛する方がましでしたらう。しかもなほ私はそれを貴下と思ひましたから、それを食べました。でも貴下はそのうちには、如實に私に味はゞれ給はなかつたので私は貪り食ひは致しません。貴下はそんな空虚なものには在さず、又私もそれに養はれることなく、却て空虚になりました。眠むつてゐる時の食物は醒めてゐる時の食物によく似てをりますが、眠つてゐる者は、眠つてゐるが爲めに、それによつて養はれません。けれども今貴下が私に仰言つたやうに、是等のものは、どんなにしても貴下のやうではムいませぬのでした。何ぜかなれば、是等は具體的幻影、虚妄の物體で、天上のものにせよ、又地上のものにせよ、私共が肉眼で見る眞の物體の方が遙に確實であるからでムいます。是等のものを獸や鳥も私共と同じく辨別致します。是等の物は私共が想像する以上に慥りし

てをります。更に又私共は是等によつて存在しない他のより廣大で、無限な物體を想像するよりも、一層精確に是等の形を感じます。當時私は斯麼殼で飼はれてをりました、しかも聊かも營養を取れなかつたのでムいます。けれど一層強くならうとして、寒れる程待ち焦れた私の愛よ、貴下は天に在すにもせよ、私共が現に見てゐる物ではムいません、又其處に私共が見ない物でもムいません。何せかなれば貴下は是等の物を創造し給ふて、しかも是を貴下の最高のみ業のうちには加へ給はないのですから。ですから貴下は斯麼私の幻想、全く存生しない物體の幻想よりは、どんなに遠いこととせう。存在してゐる是等の物の心像は、幻想よりは確實であり、又物自らは更に確實であります。けれども斯る物が貴下ではムいません。又其物の生命である魂でも在りませないでムいます。(物體の生命は物體よりも確實ですけれど)然し貴下は魂のうちの生命、生命のうちの生命、まつたく生きてゐる生命そのものであらせられます。

だから當時私から見て神よ、貴下は何處に在し、又どんなに遠くに在したのでせう。殼

で私が飼つてゐた豚の、その食べてゐる穀(文學の)さへも私は食ふ道を断たれて、貴下を離れて遠く漂浪しました。文法家や詩人達の寓話は、斯麼瞞着に比らべて、どれだけ優つてをりましたらう、詩と歌と、「飛ぶメデア」(コルキスの王アエテスの娘で、ヤソソに欺かれて、龍車に乗り、天を飛んで雅典へ歸る)は、暗黒な五つの洞があつて、その一つ毎に各々異つた原素があるといふ説(マニケウス教)は、暗黒、悪風、悪火、悪水の五つの洞窟より出るものとして、それに對して)よりも確に益が多いのです。詩と歌とは之を職業にしたら私は之を眞の食物と變へられませうが、「飛ぶメデア」は、たとへ私が歌つてゐたにしても、確實と主張することも出来なければ、又歌はれるのを聞いても、私はそれを信じなかつたのです。噫、噫、噫、眞理の要求に勞しつゝ、沸りつゝ、如何なる梯階によつて私は冥府の底までも伴れ行れましたか。未だ私が懺悔しなかつた時にも私に憐みを加へ給ふた貴下に之を告白致します。即ち私は、貴下が、獸に優させようとして給ふた心の叡智によらないで、肉感によつて貴下を求めたのでムいます。けれども貴下は私に對して、私の内部よりも一層深くましまし給ふて、私の最も高いところ

ろよりも、一層高くに在したのでムいます。私はソロモンの謎「門の坐にすわりて、密かに食らう糧は楽しく、竊みたる水は飲みて甘し」(箴言第九章十三節—第四章四節)といふ、單純、無智な貴下の大膽な女(女は愚昧の表象、門の坐に坐は)に躓きました。彼女が私を誘惑しました。彼女は、私の魂が外へ出て、私の肉の眼に宿り、彼女の誘ひに乗つて私が喰べてしまつたやうな食物を、獨りで反嚼してゐたからでムいます。

## 七 マニケウス教徒の愚

私は是以外に、眞に在るものを知らなかつたからでムいます。そこで、「惡の起原はどうだ」「神は肉體の形によつて制限せられ、髪や爪やを有つか」「同時に多くの妻をもつ者、人を殺した者、生物を犠牲に供へた者は義人と崇められやうか」(列王記第十(八章四十節)など)と彼等が私に訊いたとき、まるで自分の機敏なことを誇るものゝやうに、私は此愚かな欺偽漢共に賛成致しました。此事で私は自分の無智から非常に當惑して、自分はその方へ進んでゐ

ると思ひました。私は未だ、惡とは善の窮乏に外ならずして、遂に全く無となるものとは知らなかつたのでムいます。眼の視力は只肉體に及ぶだけ、又心眼の視力は幻影にとゞくに過ぎない私が、どうしてそれを見ませう。で私は神が靈に在して延長を有し給ひ、或はその存在容積で在まさないことを知らなかつたのでムいます。何せなれば各容積は全體に於けるよりも、部分に於て小さいものだからでムいます。又若しそれが無限であるならばその無限に於てよりも、或る空間によつて限定せられる斯麼部分に於ては、より小さい筈です。又さうなると靈のやうに、神のやうに、到る處に全體として在る筈がないのですから。では私共の内にあつて、私共を神に肖せるものは何か、又、聖書に「神の像に似せて」と言はれるのが正しいでせうか、私は全く知らなかつたのです。

又私は、習慣によつて裁かず、諸國諸時代の仕方をその國々と時代々々にとよつて處理した、大能の神の最も正しい律法によつて裁く眞の精神的正義を知らなかつたのでムいます。尤も此律法は何處にあつても變ることとはなく、此處にてはどう、彼處ではかうといふ

やうなことは無いせん。そしてそれによつてアブラハム、イサク、ヤコブ、モーゼ、ダビデ其他神の口により褒められた者は義とせられました。けれども彼等は「人の審判により審き」、自分達の小つほけな習慣によつて全人類の道徳上の習慣を裁く愚物共には不義と定められました。その有様は武器庫の内で、各々身體のいろ／＼な部に當つべきものを知らない人が、頭に脛當を被り、又は足に脛を履きなどして、よく合はないと小言を並らべるのに似てをります。或は午後には商賣が一般に禁じられてゐるものが、自分は午前からやつてゐるのだからといつて、憤つてゐるやうなものです。更に又食卓係がかまつてはならない物を或る下僕が手に取つたことを或る家で見ると、又は食堂のうちでは禁じられてゐることが、既の中では許るされてゐるのを見て、一つの家、一つ家族のうちで、同一の事が到る處に行き渡つて行はれないと憤るにも似てをります。又彼等は、今日正しくなくても、以前には義人により義とせられたといふ何事かを聞き憤る人、或は神が或る一時的理由により、彼等には或る一事を命じ給ひ、他の者には又別なことを吩咐け給ふたのだが、

兩者ともに同じく正義に従つたものだと言はれるのを聞いて、憤慨するやうな者共であります。けれども同一人か、同じ日、同じ家族に於て、それ／＼異つたものに適して、且つ以前には正しかつた事が、時の経過により正しからずなり、一方で許るされ、命令されたことも、他方に於ては當然禁じられ、又罰しられることを知つてゐるのであります。では正義は變遷するものでありますか。けれども正義の司る時間は、均分に流れは致しません。そこが時間のことですから。けれども地上の生命の短い人間は、自分が経験しない古代の他の國民の事を、現に経験してゐる事物に、當て嵌めることは感覺的に出来ないのです。が、一個の身體、同一の日、同一の家族であるならば、どの手に何が適し、どの季節には何が向き、何の部分には何が合ひ、何の人には何が良いと、直ぐに分ります。ですから昔の事はいけなくて、今の事には盲従するのです。

當時、私は斯麼事を知らず、又心にも留めませんでした。周圍にガラにあつても、私はそれを見ませんでした。私は詩を作つたのですが、何處にでも韻脚を置くことを許るされ

ず、平仄が違ふまゝ、異つた風に置かされ、又一つの平仄に於てすら、同じ平仄に於てすら、毎節に同一の韻脚を置かされませんでした。けれども私がそれに因て詩を作つた技術そのものは、是等様々な場合に對して、様々な原則があつたのではなく、總て只一つに包含されてゐたのです。でも私は善且つ神聖な人々が守つたその正義が、遂に勝れ、崇高なものであり、神の命じ給ふて、如何なる部分にも變化のないそれ等のもの總てのうちに含まれてゐるが、只それはあらゆるものを同一に規定せず、時に従つて各自に適したものを割り當てられ、配合されてゐることに氣付かなかつたのでムいます。そこで私は、盲目の爲めに、神父達が、神の御命令に従ひ、その靈に感じて、現在のものを用ふるばかりでなく、又神が彼等に示し給ふた將來を豫言さへもした事を非難致しました。

## 八 神の許し給ふ物

人にとりて、何時、何處で、心を盡し、精神を盡して、思ひを盡して神を愛し、又己の

如くその隣りを愛することが不正でせうか。ですから天性に反したその罪は到る處、如何なる時にでも憎まれ、罰せらるべきものでムいます。たとへばソドムの罪の如きものでムいます。それは如何なる國民でも犯せば神の津法によつて同じく有罪と斷じらるべきものでムいます。神は、人を斯く相互に用ふるやうには造り給はなかつたのでムいます。神と私共との間にある交誼すらも、神の造り給ふた天性が肉慾に汚されるときには、破れてしまひます。けれども人間の習慣はそれ／＼その習慣に従つて避けなければなりません。それで市、或は國家の習慣によつて定められたものは、國民であらうと、外人であらうと、何人も氣儘な行爲によつて破ることを許されは致しません。その全體と一致しないことは醜いものでムいますから。

けれども神が、人の習慣、又は制度に反して、今までになかつたことをしると、御命令なさる時には、若しそれがずつと以前に中止されてあつたものでも、現在に復興さるべきものでムいます。以前一度も法律とならなかつたものでも、現在法律と爲すべきものでム

います。なぜかなれば、一人の王がその支配する市に於て、自分よりも前のどの君主も、又自分自身も是までしなかつたことを命ずるのは正當です。又、彼に従ふことがその市の安寧幸福に反しないばかりでなく、却つて従はなければ、社會の福祉に反します。何せかなれば人間社會の一般の契約は、その主君達に従ふといふことなのですから、そしたら私共が萬物の支配者に在す神の御命令に躊躇するところなく従ふのが、どんなにか忠實なものでまいませう！ 人間の社會で、小権よりも、大権に先づ従ふのが當然であるやうに、一切のものに先んじて神に従ふのが當り前ではまいませんか。

暴虐に於ても同様でまいます。其處には罵詈雑言し、又は傷害して、他をそこなはうとする望みがまいます。そしてそれは何れも敵が敵に對して復讐するときか、或は強盜が旅人を襲ふ時か、他人と競ふて利を占めるときか、或は何人から害を受けはしまいかと鬼胎を抱く場合、或は運の悪いものが幸運なものに對する場合、又は何事か盛に成功してゐる者が他に同等の對抗者の起るを恐れる場合、或は既に對抗者が出來て困つてゐる場合など、他

に對する嫉妬の爲めか、或闘士(眞劍勝負を分せて商賣にし、てゐたロマのセラサエトル)、見、る観客、或は他を罵り又嘲ける者のやうに他人の困つてゐることを樂しみとするの場合でまいます。是等は他の上に立ち、見たり、感じたりしようと慾する望、或は其うち一つ又は二つ、或は此三つを全部萌え出させる不義の根となるのでまいます。斯うして人は、至高至美の神よ、三絃と七絃をそなへた十絃の琴、即ち貴下の十誠に違犯して悪くなるのです。けれども汚されることが

註\* モーセの十誠を三つと七つとに分けることをいふ。即ち誠めの始めには三位の神を象る。次に七つの誠めがある。それを隣人に對する誠めとして。琴の絃にたとへたものである。

絶對にない貴下に塗りつける汚れがありませうか、害を受けることが絶對にない貴下に對してどんな暴行が加へられませうか。けれども貴下は人間が自身に對して爲すことに復讐をなさいます。何となれば貴下に對して罪を犯すのは自分の魂に對して邪曲を行ふことだからなのです。又「不義は自らを虚りとし」(詩篇第廿七の第十二節)ます、即ち、貴下が創造整頓なさ

れた天性を汚し、悪用し、或は許すべからぬものに濫用し、或は禁制のものに懐れ、天性に反する用に使ひ、又は心と舌とを以て貴下に反抗して、所謂「刺ある鞭を蹴り」(使徒第九章)貴下に對して罪を犯し、或は社會の範圍を素し、自己の好惡によつて、大膽にも勝手に結合分離して悦んでをります。そして是等のものは、宇宙の唯一な眞の創造主で、又支配者に在す生命の源よ、貴下を棄てたときに行はれ、個人的の傲慢により或る一つの虚偽な物が其處から擇ばれて、愛せられることに立至ります。だから私は謙遜して、貴下に歸らんければなりません。さうすれば貴下は私共の悪い習慣を拂ひ潔め、又懺悔した罪を御慈悲を以て聞き、給ひ囚人の歎きに耳を傾け給ひます。總ての共通の善たる貴下よりも、己れ自らの善を愛し、愈々貪る爲め總てのものを失はふ危険な目にあはされ、虚偽の自由の角を貴下に向つて擧げなければ、貴下は私共が自分で造つた鎖から、私共を解放して下さいます。

## 九 罪と裁判

けれども汚行や罪のうちには、圓熟に進みつゝある人々の罪もふいます。その罪は、誤りない裁判をする人々には、完全の法則に合はないと非難もされ、又丁度之から成長する穀物の緑な葉のやうに、より善き實を結ぶ見込みがあるのだからと、推稱もされるところのものでふいます。又汚行や暴虐に似てはりますが、それでも私共の主なる神をも、又社會の秩序をも妨げないので、罪とはならぬものもあります。即ち、或る時期に適當した物を取つて、生活に使ひ、しかもそれが果して貪慾から出たものか否かを、私共が判断せられなかつた場合の如き、又は或る行爲が、矯正の目的により、規定の法によつて所罰されることがあつて、しかもそれが害を加へようとする意志から出てるかどうか分らぬ場合の如きは此例になります。だから人が見て嘉しとしない行爲の多くは、貴下の證明によつて嘉しとせられ、又人に褒められる多くのものが、貴下が證人に立ち給へば、却つて

罰しられも致します。是は即ち行爲の外観、行爲者の心理、伏在する裏面の事情等を皆異にするからでムいます。けれども貴下が不意に命令して、異常なもの、思ひ掛けないことを命じ給ふても、否寧ろそれは之まで禁じ給ふたものであつて、一時貴下が御命令を下された理由を秘密になさるとも、又それが人間の或る社會の秩序に反しましても、貴下に仕へる社會は善い社會であることは知れてをりますから、誰かその命令に従ふべきものたることを疑ひませう。然し貴下が御命令なされたことを知るものは幸福でムいます。何ぜかなれば、貴下の下僕等の一切の行爲は現在に必要なことを示し、又未來に必要なことを示すからでムいます。

## 十 マニケウス教の虚妄

私は此事を知らないで、是等神聖な貴下の下僕共と、預言者達とを嘲笑しました。が彼等を嘲いつ、私は何の獲る所がありましたらう。無花果が其實を摘み取られた時、その母

の樹が乳のやうな涙を流したといふ馬鹿けたことを少し宛信するやうになつて、貴下に輕蔑せられたくらゐのことでした。しかも其無花果が他人の手で摘み取られ、自分には之を取つた罪を負はないマニケウス教聖人の一人に喰べられて、聖人の臟腑にまじるなら、其聖人はその無花果から天使達を吐き出すといふのでムいました。いや、聖人の祈禱、嘆息に於て神の微分子を吐き出すのだといふのでムいました。さうした、いと高き、眞の神の此分子は、選ばれた聖徒の齒又は腹によつて解放せられないうちは、その果の中に残つてゐるとの話でムいましたから。すると憐むべき私は地上の木の果の方が、その果を自分の用に造つて貰つてゐる人間よりも、餘計に御恩恵を頂いてゐると信じました。それで若しマニケウス教徒でない一人の飢ゑた者が食を乞ふなら、それに與へられる一口のものは、(神がその中に在すのに、聖人が喰べて) 我には死刑に處せられたものと見えませんでした。(それを解放せず、俗人が食つたから)

## 十一 母が涙の祈り



然るに私の忠信な母は、世の母達がその肉親の死を哭くよりも一層烈しく、私の爲め貴下にむかつて泣きました時、貴下は上からみ手を伸べて、此深い闇黒の裡から私の魂を救ひ出して下さいました。母は貴下から受けた信仰と靈とにより、私が死んでゐるのを明かにさとりました。けれども主よ、貴下は母に聴き給ひました。確に聴き給ひました。又母が祈る處毎に注ぎ降つてその眼の下の地を沾うす涙を輕んじ給はなかつたのです。え、眞個貴下は聴き給ふたのです。さもなければ彼女を慰めに貴下がお遣はしになつた夢は何處から参りませう。その夢を見た後、母は、今まで私の誤謬の冒瀆を嫌つて、爲たがらなくなつてゐたこと、即ち母と共に住み、母と同じ食卓で食べることを私に許したのです。母は其眠りのうちに、自分は木製の定規の上に立つてゐると、一人の美しい青年が自分の方へ來て、愉快的顔をして、すつかり悲み情れてゐる自分に笑みかけて、何せ憂ひ悲しき日毎に涙を流すのかと訊ねました。然し人がいつも知らうと訊いてゐるやうではなくて、訓へてやらうといふやうなふうに見えました。そこで自分の哭くのは、此私が亡滅するの

を歎くのですと答へました。すると其青年は、安心なさいと、母に言ひ、更に、「お前のゐる處には彼も又ゐる」ことを、よく心をとめて見よと忠告致しました。そこで母は是に心をとめてゐますと、同じ定規の上に、自分に近く私が立つてゐるのを見ました。此幻は貴下のお耳が、彼女の心の叫びに傾けられたのでなく何でムいませう。あ、全能の善よ、貴下が我々各自を守り給ふことは恰も一人を守り給ふと變りがなく、又萬人を守り給ふことは、恰も一人を守り給ふと變りがムいません！

母は此幻のことを私に語りましたが、私はそれを解釋して、それは母が後になつたら、私の今日の状態に失望しないだらうといふことだと、曲解しましたところが、母は聊かも躊躇しないで「いゝえ、私は——わたしのゐる處にはお前もゐる——といふのではなくて——お前のゐる處にはわたしも亦ゐる——と仰言つたのを聞きました」と、答へました。私は最も確實な記憶を貴下に白狀致します、主よ。又私は屢々此事を申しました。即ち、覺醒してゐる私の母を通して貴下の御答へ——母が私の尤らしい偽りの解釋に迷はされ

ず、又當然さうであるべきことで、しかも母が言はないうちは、私が悟らなかつたことを、直ちに見破つてしまつたこと……は、その時の夢そのものよりも私を悦ばしました。其夢こそは久しいのちに實現せられるべき母の歡喜を、當時苦惱してゐた、敬虔な母を慰める爲めに、豫じめ示されたものだつたのです。その結果、略ほ九年に亘り、反對に私は深い泥濘と、虚偽の闇黒の中に轉がつて、屢々起き上らうとしながら、愈々深く沈緬したにも拘らず、此貞潔、敬虔、淑やかな貴下の愛し給ふた寡婦は、却つて益々希望に生きてをりました。それで彼女は祈りの時、常に私のことを貴下に向つて歎くを怠らず、哭きと憂ひとに少しもひるまなかつたので、その祈りに貴下のお耳はとまりました。けれども貴下は猶ほ私が此闇の中にころけまはるのを放棄つてお置きになりました。

## 十二 司教の預言的答へ

そのとき貴下はもう一つ別な答へを母に下さつたことを私は回想致します。けれども私

は貴下に對して、もつと急いで申上げねばならぬことに、心が急き立てられてゐるままから、澤山なこと漏らします、が又多く忘れも致しました。その時貴下は、教會に育てられ、貴下の聖典に通じた一人の祭司、即ち司教を通して、もう一つの答へを母に下さいました。母は其人に會つて、どうか私と話して、私の誤謬を論駁し、又悪いところを説示して、それを除き、善を教へるよう願ひましたとき、其人は、若し教へて然るべき者と見れば、教へたのですが、賢明にも私には教へませんでした。その事を私は後になつて知りました。司教は答へたのでした。「貴下も仰言る通り、あの方は異端の新説に目がくれ、傲慢になつて、未熟な者を愚問で迷はしてをられますから、未だお教へ申す時機ではありません」と言ひ、「一生懸命に彼の方の爲めに主にお祈りなさい。彼の方御自分でお讀みなさつて、その誤りを發見なさいませう」と忠告致しました。そして司教自身も、幼少の折り、誘惑された母の爲めに、マニケウス教徒とせられ、嘗に其經書の總てを讀破したのみならず、又寫し取りまでした程であつたけれど、誰からも論破せられないで、此宗派の排斥すべきも

のであることを悟り、斷然之を棄てたことを母に語りました。斯うまで司教が語つても、母はなほ安心しないで、矢張り、私に會つて、説諭してくれと、益々強く願ひ、涙を流して口説き立てましたので、司教も聊か立腹して「去つて下さい、神のみ恵み貴女に上にあれ、此のやうな涙の子は決して亡びるものではありませんから」と申しました。此答を母は屢々私に話しましたが、彼女は之を天から響いたものと思つてをりました。

## 第四篇

### 一 過誤の九ヶ年

斯うして九ヶ年間、即ち十九才から二十八才まで、私は自己を欺き、又他を誘ひました。様々の情慾に欺かれ、又欺きました。公に於て自由と稱ばれる技術によつて之を爲し、私には矢張り宗教の名を假りました。此處に傲慢があれば、其處には迷信があり、到處に虚榮がありました。一方には芝居もどきの拍手喝采をすら氣取つて、俗受けの空ら人氣やら、歌の競技、草の冠、舞臺上の虚榮、不節制な放縱を追ひ求めながら、他方には、是等の不淨から清められたく思つて、食物を、「選らばれた者」又は「聖き人」(マニケウス教の)と呼ばれる者共に持つて行き、それを食べて貰ひ、その胃袋の作用で、私共を救ひ出す天使や神々を製造して貰はうと致しました。是等の事を私は追ひもとめ、私に欺かれた友達

私と共に欺かれた友達と一緒にやつてやりました。私の神よ、傲慢でありながら、未だ貴下の爲めに、その魂の救はれるように打ちのめされ、踏みくだかれたことのない者共に私を嘲らして下さい。けれども私は貴下を讚美して、自分の恥を告白致します。どうぞ私を免るし、私の過去の誤謬を廻避することによつて、現在の記憶を打消して下さい。そして歡喜の供物を貴下に捧げさせて下さい。貴下が在まさなければ、私は自分の墮落の案内者たらずしてどうしまししょう。でなくとも只貴下の乳を吸ひ、不朽の食物に在す貴下に養はれる嬰兒ならで、果して何者でムいませう。又人が人たる外、人は何でムいませう。けれども強い者が私を嘲笑してもかまひません、只弱く、貧しい魂(我)にいつも貴下に告白させていたゞきます。

## 二 修辭學を教ふ

私は其數年の間修辭(雄辯術とも譯して)の術を教へました、そして自分では慾望に負けな

がら、それによつて他に勝つべきお喋りを賣りました。けれども私は、(主よ、御存じでムいます)その時でも善き弟子と言はるゝ如き弟子を取りたいと望みました。そして斯る者に、何の偽りもなく、明らさまに欺くことを教へました。尤も無辜の者に對して此術を用ひるのではないのでムいました。然し時には有罪の者の辯護には用ひたこともムいます。そして神よ、貴下は遠くから、滑り易い路に、僅かな信仰の燃え上りきらぬ閃きを發して無暗に燦りながら、跼蹐めてゐる私を御覽なさいました。私はその信仰の光りを自分の伴侶にしてゐる、虚榮を好み、虚偽を好む者共の道しるべに致しました。其頃私は一人の女をもつてをりましたが、それは正式の婚姻によつて知つたものではなくて、無思慮放肆な情熱に驅られて得たのでムいました。けれども私は唯其女一人をもち、それに貞操を守りました。子を生む爲めの結婚の拘束と、肉體的戀の約束との間にある相違を、私は彼女に對する私の例によつて經驗致しました。肉情にあつては子供は生れゝばそれに對して愛情が起りますけれど、その生れるのは自分の意志には反するのでムいます。

私はなほ一つ憶ひ出しましたが、それは劇場で歌の競技に加はらうとしたとき、何とも得體の知れない妖術者が私に對ひ、月桂冠をきつと手に入れさせて上げるが、一體いくら拂ふかと訊きました。けれども私はさうした汚ない秘法を憎み嫌つたので、其者に答へて、たとへ冠は黄金で出来てゐて、不朽のものであつても、私はそれを手に入れる爲め、蠅一疋の生命すらも取らうとは思はないと申しました。さう言つたわけは、妖術者はその供物にきつと生物を殺し、それによつて悪魔を私の身方につけることが分つてゐたからで、いけません。けれども、私の心の神よ、私が此悪事を斥けたのは、貴下に對する節操の爲めでは、いけませんのです。何せかなれば物質的輝きの外には何も知らなかつた私は、貴下を知つてをりませんでしたから。斯る架空な妄譚を信ずる魂は、貴下を離れて姦淫を行ひ、偽りの希望に寄り縋り、風を喰べてをるではありませんか。然し私は確に、妖術者が、私の爲に犠牲を供へることを望まなかつたので、いりますが、矢張り、自分の迷信を捧げることによつて、私自身を捧げたのです。何せかと云へば風を食ふといふことは、その悪魔を食ふ

こと、換言すれば、道を踏み迷ふて、彼等の歡喜と嘲笑的となるのでなくて何でいませう。

### 三 占星術を學ぶ

そこで私は占星術者といふ欺偽師共に、憚らずして相談しました。それは彼等が何の犠牲も捧げず、又そのトビをするに何等の靈にも祈りをしなかつたからで、いいます。その術はキリスト者も又眞の信仰も嫌つて、弾劾するものでありました。何せかと言へば、貴下に告白して、「我を憐み、わが魂を癒やしたまへ、われ汝にむかひて罪を犯したればなり」(詩篇第四十一の四)と云ひ、又貴下の慈悲を濫用して、罪に耽らず、却つて「見よ、なんぢ癒えたる主のみ聲を記憶するのは善いことだからで、いいます。總て此救をもたらず勸告を亡ぼさうと努めて申しますには、「お前が罪業の原因は天に定つてゐるもので避けられないものだ」

と言ひ、又「さうしたのは金星と、土星と、火星の爲すわざだ」などと言つて、人、即ち肉にも、血にも、又傲慢な腐敗にも責を歸せず、造物主や、天の支配者や、星やに罪を塗りつけようと致しました。けれども各々その業に従つて酬るをなし、碎け、悔いてゐる心をも輕蔑し給はない者は、柔和で、正義の源である私共の神より外誰があります。

その頃、非常に醫術に巧妙で、斯界に名高い人がありました。其人は執政官でありましたから、その手で逆上してゐる私の頭に競技の冠が置かれました。勿論それは醫者の資格をもつてしたのではムいせん。何ぜと申せば、此病は、只「高ぶる者を拒ぎ、謙卑る者に恵み給ふ」(ペテロ前書第五章五節)貴下の外には醫することが出来ないのでムいますから。けれども貴下は此老醫によつて私の魂を醫すことに失敗なさいましたらうか。私は愈々此人と親しくなり、彼の教へを堅く信頼しました。彼の語は洗煉されたものではなかつたのですが、思想が生々としてゐましたので、眞面目にも、又愉快にも聞えました。彼は私との會話により、私が占星家共の書に耽つてゐるのを知り、慈父の如く懇々として、その不可を説き、

有用なことに心配して、努力して、斯麼無益なものにかゝつらうなと、私を諫めました。彼は申しました——自分は少年時代に此術を學び、之を生業とするつもりであつた。若しヒツポクラテース(醫術の元祖である)を解したなら、此術にも通じ得られるだらうといふ希望をかけてゐたのだつた。けれども自分は後それを止めて、只醫術にのみ専心した。といふのは他でもない、それが最も甚しい欺偽であることを知つたので、元來眞面目な自分は、人を欺いて生活することを好まなかつたからである。「けれども君は身を立てる修辭學を職業にしてゐるのだから、必要上からではなくて好んで此欺偽をやつてゐるのだ。だから猶更君はその眞義に通じて、それだけで生活を立てようとした此私を信用しなかりやいかんよ」と申しました。では占星術で多く豫言的中するは何ぜですかと訊きましたら、彼は、自分出来るだけのことを答へました。「萬物に普及してゐる偶然いふものゝ力によるのさ。苦し人が出鱈目に詩人の本を開いてみたとする。すると詩人は全く他のとを目的として歌つてゐるのに、その詩句が屢々、吃驚する程現在の事實に符合することがある。だから、

人間の魂の中から、それ自身では何をしてゐるかちつとも知らない、或るより高等な本能の働きによつて、訊ねてゐる者の事件や事實にきつちりと合ふ答へが出たからつて、別に不思議なことではない」と。

其人から、即ち其人を通して貴下は斯の通り、眞によく私の事によく氣をつけ、後私自身で検査するように、私の記憶に其事を下書して下さいました。けれども當時は未だ、此人でも、又私の最親愛なネブリデイウス（極めて性質の善い、潔白な青年で、占ひを全然嘲つてゐた人）でも私を説服して、此術の研究を断念させることが出ませんでした。其譯は斯道の著者達の權威がなほ私に對して強かつたのと、一つは又斯うした學問の先生達によつて豫言されたことは、ほんの偶然であり、まぐれ當りであつて、星を見る眞の術によるのではないといふことを、明瞭に、少しの疑ひもなく論證せらるゝものを私が求めてゐましたのに、それが與へられなかつたからなんです。いいます。

#### 四 親友の死

その頃、私が始めて自分の故郷で修辭學を教へ始めた時、學問の仲間から、同じ齡の、青春の花咲きみたゞる、一人の親友を得ました。此者は小さい頃から私と同じやうに育ち、二人とも同じ學校に出て一緒に遊んだのでした。けれども彼は未だ後になつてのやう眞の友達ではなかつたのです、否、後になつても本當の友ではなかつたのです。といふのは、貴下から私共がいたゞく聖靈により、又汎く私共の心に注がれる愛によつて、貴下に繼り、貴下が結び給はなければ、友情は本當ではないのでムいますから。けれども私共の友情は同窓の熱によつて煮え立ち、非常に愉快なものでムいました。ですから、私は、彼が年若かなため、彼が眞實に、又充分に入つてゐなかつた本當の信仰から彼を誘ひ出して、私の母が嘆いてゐた迷信、邪説に彼を引き入れました。そこで今は彼は私と同じに心に迷ひが出来、又私の魂は此者がゐなくては在ることが出来なくなりました。けれども復讐の神に

在して、同時に又慈悲の源にまします貴下は、貴下から逃げ去る後に追ひ縋り、不思議な方法によつて私共を貴下に立ち歸らせ給ひました。即ち貴下は此者を、此世の何にも換へ難く楽しい私との交情の一年を、未だ満たしもあへぬうちに取り給ひました。

誰か、自分の心にだけ感ずる貴下の讚美を算へることが出来ませう。私の神よ、その時貴下は何をなさいましたか、又貴下の裁きの淵はいかに測り難いでういませう。彼はひどい熱で、死の汗をかいて、氣絶してゐましたから、絶望と見られて、自覺のないのに洗禮を授けられました。けれども私はそんなことには注意せず、彼の魂は、その感覺のない身體に施されたものよりも、寧ろ私から受けたものを保存するだらうと思つてをりました。けれどもまつたく違つたことが起りました。即ち彼は甦つて、健康を恢復したのでういませう。で彼が私と話すことが出来るや否や（私は決して彼のそばを離れず、且つ私共は互に深く信賴してゐたからでういます）直ぐに、彼が理解も、感じもない間に、此頃受けて、その受けたことをやつと今知つたばかりの洗禮について、嘲らうとしました。私は彼も又

私と一緒に洗禮を嘲るだらうと思つたのでした。けれども彼は恰も敵にでも向ふやうに、私に對して戰慄し、突然、不思議に自由な態度で、若し私が彼の友人となつてゐる積りならば、彼に對してそんなことを言ふのは止めて呉れと、私に命じました。私は驚いて、彼が回復して、私の好きなことを一緒にせられる程、彼の健康の強くなるまでは私の感動を押へました。けれども彼は貴下と共にをる爲め、又私の慰藉に控へて置かれるやうに、私の狂愚から取り去られました。即ち數日後、私の不在の時、熱が再發して彼は死にました。此悲しみは私の心を暗くし、私が眺めるものは皆死ばかりになりました。故郷は居辛い處、父の家は非常な不幸となり、又私の友人と一緒にしたことは、今はその人が無いので最も恐ろしい悩みとなりました。私の眼はあらゆる處に彼を求めました、けれども彼は私の眼に見へませんでした。又彼が居ないので、私はあらゆる場所を憎みました。又生きてゐた日、彼が不在の當時に言つたやうに、今は「なあに、直き來るよ」と、言ふ言葉を私はもう聞くことも出来なくなりました。私は自分を大きな謎と思ふやうになりました。私



は自分の魂に「何せ哀しむのだ、又何せ私を素すのか」と尋ねましたが、魂はどう私に答ふべきか知りませんでした。若し私が「神に期待せよ」と云つたところで、魂は當然私に従はなかつたのでムいます。何ぜかなれば魂の失つた此最愛の友は人でありましたから、期待せよと命じられた此幻想的な神よりも、一層眞實で、一層善かつたからでムいます。今は只涙だけが私に快よいものとなりました。それは私の愛情の極致といふ處で友人の代りをするやうになつたからでムいます。

## 五 涙は何ぜ甘いか

然し主よ、今、是等の事は過ぎ去つて、時の経過は私の傷の痛みを和けました。何故憫む者は泣けば心が慰められるか、眞理に在す貴下から、私は聞くことが出来ませうか。又貴下が私に語り給ふやう、私の心の耳を貴下の口に向けられませうか。或は到る處に在すけれど、貴下は私共の悩みを、速くへ投げ棄て、おしまひなさいましたか。又貴下は恒に

貴下に在ますけれど、私共は様々な試煉のうちに轉ろけ、まろびます。しかも私共は貴下の御耳に向つて嘆かなければ、他には残る希望とてもムいません。だからどうして人生の苦難である呻吟、涙、嘆息、又不平から甘い果實を摘み取ることが出来ませう。貴下が聞いて下さるといふ希望をもつことが、それを甘くするのでせうか。之は私共の祈禱については正しい考へでムいませう、祈禱は貴下に近づく希望を内に含んでをりますから。が是は亡くなつた者に對する悲哀、又はその時私をすつかり溺らした悲哀についても矢張りさう言はれるでせうか。何ぜかなれば、私は其時彼の甦りを期待してをらず、又甦りの爲めに涙を流して祈りもしなかつたのです、たゞ自分の惨めさと、すつかり喜びを失くしたもので、烈しく泣いたのですから。或は哭くのは苦しいものでも、私共が以前に楽しんだものが厭になり、そしてその楽しみが厭になつた時、涙が私共を快からしめるのですか。

## 六 烈しき悲み

が一體何だつて私はこんなことを語るのですか。それは今は訊くべき時ではなくて、貴下に懺悔すべき時だからでういませんか。あはれなものは私でした。又朽つべきもの、友情によつて結ばれる魂は何れもあはれなものでういます。その人は朽つべき物を失へば、まだ失はなかつた以前から既に惨じめであつた、その惨じめさを始めて感ずるのでういます。私は當時此通りで烈しく泣いて、而も其つらさのうちに最も良い安靜を得ました。私は斯うも惨じめでした、しかも其惨じめな生活を、私は自分の親友よりもつと愛くしみました。何ぜかなれば、私は此生活の轉換を欲しましたけれど、なほ親友を失はうよりも、此生活を失ふことを欲しなかつたからでういます。のみならず、彼と交誼をつゞける爲めにすら、此生活を失つてもいいと思つたかどうか私は存じません。それは丁度オレスチースとピラデースとの傳説（若し物語でないとするれば）のやうに、一緒に生きてゐないのは、死ぬよりも悪いと言つて、互に死を喜んだやうでした。けれども又之と反對の感情が私のうちに生じました。即ち人生は私に取つて甚だ煩さく、死は又恐ろしいものになりました。

した。私は想像致します、彼を愛することが強ければこそ、彼を私から奪ひ去つた死を、最も惨虐な敵として、憎みもし、恐れもしたのでらうと。又死は彼を殺す力をもつてゐるのだから、速かに總て他の人々をも亡ぼすだらうと想ひました。私は全く斯う考へたと記憶致します、私の神よ、私の心を見、私の内部を照覽ませ。私の希望よ、御覽下さい私は之を記憶致してをります。貴下こそは私をこんな愛慾の不潔から潔め、私の眼を貴下に向はせ、又私の足を係蹄から引き出して給ふのでういます。私は、まるで永久に死なぬものゝやうに思つて愛してゐた彼が、今死んでゐるのに、他の人間が生きてゐることが不思議だと思ひました。いや、彼に取つては第二の自我たる私が、彼の死後なほ生きてゐられることを一層不思議に思ひました。或る人がその友人を、私の魂の半分と言つたは至言でういます。私はなほ、自分の魂と彼の魂とは一つ物で、二つの身體に入つてゐるものと感じたからでういます。だから私は半分になつて生きてをられない筈ですから、私の生命は、俄に私にとつて一つの鬼胎おまけとなりました。だから、多分、私がそんなに強く愛してゐ

た彼が、全然死んでしまふだらうと心配して、自分の死ぬことを恐がつたのでムいませう。

## 七 郷里を去る

あゝ人が當然愛せらるべきやうに、人を愛することを知らぬ狂氣よ。あゝ當時私は人間の運命にもだえた愚人であつたのだ。私はその時苛立ち、嘆き、泣き、取り紊し、安静も、思慮もなかつたのです。私は、ちつと穩しく私に抱かれてをらうとしない、私の裂かれて、血みまれになつた魂を持ち歩るいたのです。が私はそれを卸ろすべき場所を見出せませんでした。楽しい林の中にも、遊戯又は歌にも、甘い香りのする庭園にも、珍らかな宴會にも、寢床、又は寢床の快樂にも、又詩文を繰り返し讀んでみても、憩ひは發見されなかつたのです。あらゆるものはいやでムいました。えゝ、光りでさへも厭でした。何事にもあれ、彼のゐないことが私にとつては苦痛で、又厭はしかつたのですが、只嘆息と涙とが例外でムいました。といふのは私はそのうちにだけ、ほんの僅かな憩ひを發見したからでム

います。けれども私の魂が嘆きと涙とから離れたときには、どれ程重荷を負はされたでムいませう。主よ、此重荷は只貴下の御手で揚げられ、輕るくせられるべきものでムいました。私も之を知つてゐましたが、さうする意志も又力も私にはムいませんでした。といふのは當時は貴下のことを思つても、貴下は確固、實質的なものとは見えなかつたからです。當時本當の貴下が私の神ではなく、私の愚かな妄想や誤謬が私の神だつたからです。憩ひうとして、よしその上に私の重荷を卸ろさうとしたところで、重荷は虚空に落ちて、再び私の上へ降りましたらう。斯うして私は依然として不幸な重荷の置き場となつてをりました。私はそれに安住することもならねば、又立退くことも出来ませんでした。私の心が私の心を立退いて何處へ行かれませう。又自から去つて何處へ逃げませう。何處へなら自分のあとをつけて行かれないでせうか。それでも私は自分の郷里を逃げ出しました。それは彼を見ることの出来ない處に、私の眼が彼を餘計に求めないようにし度いからでムいました。斯うして私はタガステの市からカルターゴに來ました。

## 八 時は慰藉者

時は空しく時を過ぎしません、又怠惰に過ぎ行きません。私共の感覚を通して、心に不思議な働きを致します。御覽なさい、時は毎日に來て又過ぎ去りました、そして去來してゐるうちに私の心に他の觀念、他の記憶が起つて、少し宛古き歡喜を以て心の破れを繕ひ私の現在の悲しみはそれに幾分か處を譲りました。それに又他の悲しみではなくて、他の悲しみの原因(この世の快樂)が後を継ぎました。何ぜかなれば、私が、死ぬべきものを、決して死なぬもの、やうに愛して、自分の魂を埃りの上に注いだからでなければ、何處から以前の悲しみが私の魂の奥底に其様に容易く侵入する事が出来たらう。殊に私を力づけ、又爽快ならしめたのは私が後に愛したものを、私と一緒になつて愛した他の友人達の慰藉でありました。愛したものは即ち大きな作り話(マニケウ)又長い嘘でふいました。この姦淫にそゝられて、私の耳の内にムヅ／＼しながら入つてゐる私の魂は腐らされてしまひ

ました。けれども此話は、屢々私の友達が死ぬる程、私に取つて、やす／＼と死にはしませんでした。他に彼等と一緒に、私がすつかり心を奪はれたものがありました。即ち共に談笑し、交互に親切を盡して、面白い本を讀み、或る時には戯れ、他の時には即互に眞面目に過ぎ、時には自分にするやうに、別段悪意があるのではなくて、わざと逆らつてみたり、又稀に此逆ひでもつて、私共の層層々な和合に味をつけ、或る時には互に教へ、互に學び、ゐなければ待ち悶え、來れば喜び迎へました。斯るものや、愛し又愛される人々の顔付、言葉、眼色、その他幾百千の愉快な舉動によつて、私共の魂は薪のやうに燃え上り、多くの魂を只一つに致しました。

## 九 神によつての友情

之が友人といふものに於て尊ばれるものでふいます。又若し彼が自分を愛して返す人を愛しないなら、或は自分を愛する人を愛して返さないで、只その人が愛情の表示をしてく

れることより外には何物をも期待しないならば、人の良心は自らを責めます。ですから誰か友人が死ねば喪があり、悲哀の闇があり、心は涙に濕り、總ての楽しみは苦しみに變ります。だから又死にかけてゐた者の生命が失くなると、生きてゐる者の死が來ることがあります。貴下を愛し、貴下にあつて其友を愛し、貴下の爲めに敵を愛する者は幸福でいます。何ぜかなれば不朽の者に於て、總てを愛する者は、其最愛のものを聊かも失ふことがありませんから。是こそ私共の神より外誰がありません。神よ、貴下は天地を充たし給ひました。これを充たすことによつて造り給ふたからでいます。貴下を棄てる者の外、何人も貴下を失ふものはありません。又貴下を棄て、何處に行き、又何處へ遁がれませうそれは單に悦び給ふ貴下を去つて悦び給はぬ貴下に行くだけのことでいます。如何かと云へば自分が受ける刑罰のうち、何處に貴下の律法が発見せられないでいますか。貴下の律法は眞理で、眞理は即ち貴下御自身でいます。

## 十 魂の憩ふ處

「萬軍の神よ、再び我等を復し給へ、なんぢの聖顔をわれらに示し給へ、さらば我等救はれん。」(詩篇第八十の十九)と云ふのは、人の魂は何方に向いたところで、貴下に向はなければ、よしや美しいものに定着しても、矢張り悲みに行き當つてしまふからでいます。まづたく貴下からでなければ、その美しいものも有ることは出来ません。それは生じ又滅します。生ずることによつて存在を始め、完全にならん爲めに成育致します。完成し、老ひ、體て滅びます。總ての物が老ひはしませんけれど、總ての物は滅びなければなりません。だから生じて存在を始める時、愈々速に成長すれば、愈々存在しまいと急ぐのです。これが萬物の法則です。貴下は斯の様に萬物を定め給ふたのです。何ぜかなれば是等は、一時には存在しない、物の部分で、自己が集まつて、全き宇宙を去り又來て、形造くるものだからでいます。此通り私共の話も意味ある音によつて行はれます。しかもその言葉すら、一

つの言葉が自分の分を響かして、過ぎ去り、その後を他の言葉に繼いで貫はなければ、完全にはならないのでムいます。萬物の造主に在す神よ、是等のものによつて私の魂に貴下を讚美させていただきます。けれども私の身體の官能を通して、愛の膠を以て、私の魂を是等のものに粘りつかせないで下さい。何ぜかなれば萬物は無に歸さうとして、その行く可き處へ行くべきもので、又疫病のやうな戀愛を以て、魂を切り裂くのに。然るに魂は存在せんことを望み、その愛するもの、うちに憩はうとしてゐるからでムいます。けれども是等のものは存在をつゞけずして、遁け行きますから、さうした場所がそのうちにはムいません。又誰か官能の働きでその後を跟けられませうか、まつたく其近くにある時すらも誰か是を捉へることが出来ませうか。私共の肉の感覺は矢張り肉の感覺だけあつて、その働きが鈍く、只それつきりに止るものでムいます。官能はその造られた目的を達するには充分でも、定められた發端から、定められた終局の途を走る物を引留めることは出来ません。何ぜがなれば萬物を造つた貴下の言葉のうちに、萬物は「此處から此處までだぞ」と

いふ自分達の運命を聞いてゐるからでムいます。

## 十一 萬有は變るも神は變らず

私の魂よ、愚であるな、又前の愚を以て心の耳を聳にするな。けれども聞け、「道」御自身がお前に立飯れと呼び給ふのだ。又其處には妨害も受けない靜かな場所があつて、其處ではお前の愛は、自棄にさへ陥らねば、決して棄てられることはないのだ。見よ、是等の物は、他の物を自分達の位置に來させて、此最低の宇宙をそのあらゆる部分によつて完全せしめる爲めに、過ぎ去るのである。けれども神の言葉はいふ「私は何ぞへ行つてしまふだらうか」と。其處にお前の住居を定め、お前の持つてゐるものを總てそこに預けなさい、私の魂よ、少くともお前は今是等の虚妄に疲れ果てゝゐるのだ。「眞理」から戴いたものは何でも「眞理」に御頼みして置きなさい、さうしたらお前は何物をも失はないだらう。またお前の腐れにも再び花が咲き、お前の倦怠も皆癒やされやう。又お前の衰へ行くことは

總て、陸張りとなり、新らしくなり、お前に結びつけられるのだ。なほ又それはその自ら下つた場所にお前を置くこともなく、お前と一緒にゐて、永久に確立して止むときない神のみ前に、永久にしつかと立つであらう。

然らば、私の邪まな魂よ、お前はなぜ矢張り自分の肉について行くのか。寧ろお前が心をかへて、お前について來さしちや奈何だ。

何には兎もあれ、お前が肉によつて感ずることは只部分だけである。是等をその部分とする全體をお前が知らないのだ。しかも之等のものはお前を悦ばせる。けれども若しお前の肉感が全體を知ることが出來、お前の受くべき罰の爲め、全體のうち一部分に、それが局限せられるのでなかつたなら、お前は今の世に存在するものを悉く超越して、そこで全體が愈々お前を喜ばしたであらうに。といふのは私共が語ることを、お前も(自分の魂にいふ言)亦同じ肉感によつて聞くからである。けれどもお前は同じ綴りを永久に響かせずに、速に飛び去らせ、他の綴りを來らせ、お前が全體の文句を聞き取らせるやうにする。凡そ一つ

のものが多くより成り、その多くの總てが一緒に存立してゐないときには、若し總ての悦びが同時に感じ得られるものとすれば、いつも此通り、一つづゝゐるよりも一緒にゐる方が人を喜ばすことは確かである。けれども是よりも遙かに善いのは萬物を造つたものである。その者が私共の神であらせられる。又神は後繼者をもち給はぬから、去り給ふことは決してない。

## 十二 神に於ての平安

若し物體がお前を悦ばしたら、その爲めに神を褒め、お前の愛を、その物體を造り給ふた神へ返せ。でないとお前を悦ばす是等のものにより、神の不興を招く恐れがある。若し魂がお前を悦ばすならば、それが神にあつて愛せられるやうにしなさい。それは魂も變るものではあるが、神に於ては確立せられてゐるからである。でなければ魂は去つて、死んでしまふのだ。だから彼等は神にあつて愛せらるべきである。そして又お前が出來る限り

の多くの魂をつれて神に行き、その魂共に言へ——我々は神を愛しようぢやないか、神を愛しよう。神は總て是をお造りなされたのだ、又神様は是を離れて遠くに在さないのだ——と、何ぜなれば、神は之を造つて、それから去り給はないで、萬物は神から出て、神のうちにある。見なさい、真理の香るところには何處にでも神は在すではないか。神は胸の奥に在すのに、心は神を離れて迷ふのだ。再びお前等の心に歸れ、お、反逆者共よ、そしてお前達を造り給ふたお方にしつかりと縋りつけ。神と共に立て、そしてお前達は安全だ。神に於て憩へ、そしてお前達はゆつくりと休まれる。此嶮路をお前達は何處へ行くのか。噫何處へ行くのか。お前達が愛する善は神から出てゐる、神に關係してゐるからそれは善でもあり、又快くもあるのだ。けれども神より出づるものを何でも不當に愛して、その爲めに神を棄つるなら、それは當然苦がいことになる。お前達は今、何處へ此困難なわづらはしい路を前へ前へと辿つて行くのか。お前が求める憩ひは其處には見出されないぞ。お前等の求めてゐるものを求めなさい、たがそれはお前等が求めてゐる處ではない。

お前達は死の國で幸福な生命を捜がしてゐる。けれどもそれは其處にはない。少しも生命のない處に、何で幸福な生命があらう。

けれども私共の此生命は其處に下つて、私共の死を取り去り給ふて、その生命の豊富によつて死を殺し給ふた。彼は又私共を此處から彼に歸らせ、そこからお出でなされた神秘的な場所に来いと、雷鳴の轟きをもつて呼び給ふのだ。彼は先づ處女の胎に入り、其處で人間、即ち朽つべき體を、永久に朽ちないやうにと、娶り給ふたのだ。そこから彼は「宛ら新郎がその殿より出づるが如く、勇士か競ひ走るを歡ぶが如く」であつた。彼は躊躇せず、言葉と、行爲と、死と、生命、降誕と、昇天とにより、大聲叱呼して、私共を彼に復歸せしめ給ふたのだ。そこで彼は私共の眼前を離れてお去りになつたが、それは私共が自分の心に歸つて、其處に彼を發見するやうにといふ御配慮に基づくものだ。彼は去り給ふた、が見よ、矢張り其處に在すのだ。彼は永く私共と共に留まらうとはなさらなかつたが、私共を全然放棄りはなさらなかつた。彼が行き給ふたところからは、彼は決して去り給はな



つた。といふのは世界は彼によつて造られたのであるから。又彼は此世に在したので、此世に罪人を救ふ爲めに來給ひ、彼に私の魂は今告白し、彼はそれを癒し給ふのだ、その魂は彼に向つて罪を犯したからである。人の子等よ、お前達はいつまでもそんなに愚鈍なのか。生命は既に來り給ふたのに、お前達は未だ上らうとせず、生きようともしないのか。けれどもお前達は高くにゐるから、天にまで頭をあげてゐるから、此上何處へ上るのだ。お前等が上る爲めに、神へ上る爲めに、降りて來なさい。神に反して上ることは墜ちるといふことだぞ。此涙の谷に泣かせる爲めに、お前達が愛する魂共に斯う言つて、彼等をつれて神のみ許に行きなさい。若し慈悲の火に燃えて語るなら、彼のみ靈によつてお前は語つてゐるのだ。

### 十三 愛の源泉

神よ、私は其時分、こんなことを知らないで、是等低級な美に魅せられて、ドン底にま

で沈み、友達に言つたので、ムいませす——「我々は美しくないものを愛するか。では何が美しいか、何が美であるか。斯く我々をまどわし、我々の愛するものに我々の愛着を惹くものは何か。若しそんなものゝうちに優美がなければ、どんなにしてもそれは私共を惹き付けることは出来ないのぢやないか」と。而して肉體のうちに一種の全體を形造る美があること、更に又身體全部とその部分との關係のやうに、又は靴の足に於ける等の如く、互に適應するもう一つの美のあることを認め、さとりました。此考へが私の胸の奥に浮んだので「美と適合」とについて、若干の著書を出しました。二三冊と思ひますが、今私は此書を自分は有たず、失くしてしまひましたから、どうなつたか知りません。

### 十四 美學の自著について

けれども主なる私の神よ、何が私を動かして此書を、羅馬の辯舌家ヒエリウスに献けさしましたか。私は彼の顔を識らなかつたのですが、その隆々たる盛名により、彼に私淑し

てをりました。又私が聞いて喜んだその言葉が好きだつたのです。けれどもそれ以上に私の氣に入つたのは、彼が人々の氣に入つて、世間が非常に彼を賞讃したからでういます。即ち彼がシリヤ人であつて、初め希臘の雄辯術を學んだのが、後に驚くべき羅典の雄辯家となり、又特に智識に關する總ての學問に長じた人であるといふことが私の氣を惹いたのです。人はその居ないところでは褒められ、愛しられます。然らば此愛は賞する者の口から直接に聞くもの、胸に入るのでういませうか。いえ、一人の愛する者があれば、それによつてもう一人の者も燃やされます。ですから賞める者が偽りのない心で言つてゐると信じられる時、即ち愛する者がその愛人を賞めるとき、賞められてゐる者が愛しられることとなります。

何人も欺き給はぬ神よ、當時私は此通り、貴下によつてゝなくて、人々の判断によつて愛しました。けれどもなほ私が愛したのは私共の俗惡な愛好心からその名を喧傳されてゐる有名な戦車乗りや獵人でなかつたのは何せでういませうか。否、そんな者どころか、

(私が愛した人々は)一層眞面目に、私が自分でもさう褒められたいと思つた人々ではありませんか。私自身では俳優を褒めて、愛してゐましたが、自分は俳優として褒められることを欲せず、そんなことで賞讃せられるよりも、寧ろ隠れてゐたい、さうして愛しられるよりも寧ろ憎まれないと望んでゐたのでういます。扱て斯る種々様々の衝動は、一つの魂のうち、何處に分布されてをりますか。どうして私は同じ人間でありながら、私に有ることが嫌ひなもの、私自身からは棄て、押しのけたいものを、他人にあれば、どうしても私は愛するものでせうか。自分が善い馬になることが出来たところで、善い馬になることは願はないで、只それを愛する人があつたからとて、それを以て直ちに人間である俳優の場合に比較することは出来ません。では同じ人間でありながら、私は自分がなりたくないものを、他人に於て愛するものでせうか。人は大きな深淵でういます。お、主よ、貴下は「その髪をも算へ」(馬太傳第十、章廿九、卅) 給ふので、それは貴下のお目を免れることはういません。けれども人の愛着や、その感情よりも、彼の頭の髪を算へる方が遙かに容易でういます。

けれども此演舌者は私が自身でもさうなりたいたいと思つた程のものでムいました。私はいやます傲慢によつて、誤り「さまざまの風に吹き靡かされ」(エペソ書、第(四章第十四節)ました。けれども矢張り知らずくりに貴下のみ手に操られてをりました。さて又私は、其人の名聲を高めた善い才能そのもの、爲めよりも、其人を愛した者共の愛の爲めに、彼を愛したことをどうして知り、又どうして確實な理由に立つて告白致しませう。則ち、若し同じ人々が其人を褒めないで、却つて貶したとしたら、又貶したり、輕蔑したりすることに於て、その人に就いて同様なことを言つたなら、私は決してそのやうに燃えもしなければ、その人を愛するほど氣乗りがしなかつたのでせうから。しかも確に事實はちがひはなく、その人自らも異りはなかつたでせうに、只語る人達の感情だけが異つてゐたゞけでムいます。御覽なさい、未だ真理の堅實さによつて支持されない無力の魂の仆れてゐるのを、丁度舌端の嵐が批評者共の胸から起り、それは前後左右に吹きまくられ、光りはそれから隠くされ、真理は見えなくなるやうなものでムいます。けれども御覽なさい真理は私共の前にムいます。

す。

自分の辯舌と、學殖とがその高名な人に知られるのは、私にとつて大事なことでありました。で、もし彼がそれを認めれば、私は一層熱を高めますし、若し又彼が非難したら、全然貴下の固めを缺く私の虚しい胸はすつかり傷けられてしまふのでした。けれども美とその適應とについて彼に書き送つたことを、私は想ひ出してはニコくして、誰も賞めてくれもしないのに、自分獨りで嘆賞してゐたのでムいます。

## 十五 神を求む

然し、只獨り奇蹟を行ひ給ふ全能者よ、私は未だ此重大な事が、貴下のみ業のうちに、中樞を置いてゐるのだとは知り得ませんでした。私の魂は有形物の間をさまよひ、私は、只がれ自らだけで美しいものを美しと定めて、區別し、又他の物に應用して始めて美しくなるものを適合と致しました。私は之をいろいろの實物で例證致しました。又私は魂の本

質についても研究致しましたが、精神的のものに關する先入の謬見が私に眞理を發見することを許るさなかつたのでムいます。只眞理の力は時々私の眼に閃めきましたが、私は私の鼓動する魂を總ての無形物から、それに輪廓、色彩、並に仰山な容積に轉換致しました。そして魂のうちにこんなものが見られなかつたから、私は魂は見る事が出来ないものと考へました。斯うして私は徳として平和を慕ひ、惡として不和を憎みました。前者に於て私は一致を認め、後者に於て一種の分割を認めました。その一致に於て、私は合理的の智、眞理並に至上善の性質の存在を認めました。けれども此分割のうちに、愚かにも私の知らない非理性的生命の實質、並に實質ではないばかりか、又眞の生命である最大惡の性質でしかも、噫私の神よ、總ての物の本源たる貴下から出てゐないものがあると想像致しました。けれども私は前者を性をもたぬ魂であるとして單元と呼び、後者を複元と申しました。複元は即ち犯罪に於ける忿怒、暴行に於ける肉慾の如きものだつたのです。私は惡は實質ではないこと、又私共の魂は主要、且つ不變の善ではないことも知らねば、又學びも致さ

なかつたのです。

若し自ら衝動を有する、又傲慢粗暴を働くその魂の運動が腐敗してをりますならば、罪となるやうに、又肉の快樂が決行する魂の愛執が過度に亘る時、害が生ずるやうに、誤謬や、虚偽な意見は、若しその理智の魂そのものが悪くなつてをれば生命を汚すのでムいます。私に於てもその通りでムいました。當時私は、魂は自らが眞理の核心ではないからそれを自分の分擔者たらしめるには、別な光りによつて輝らされなければならぬことを毫も知りませんでした。貴下こそ私の蠟燭を灯して下さいますに、お、主、私の神よ、貴下こそ私の暗を輝らして下さいますに。貴下の充滿から、我々は皆受けてをります。貴下は「世に來る總ての人を照らす光に在す」(ヨハネ傳、第一章第十六節) のですもの、「貴下にあつては變ることなく、又變る影もない」(ペテロ前書第五章の五) (ヤコフ書、第四章第六) のでムいますもの。

けれども私は貴下に迫つて、しかも、(私は傲慢であつたがために) 死の味を舐めよと、跳ね返されしました。貴下は高ぶる者を斥け給ふからでムいます。又貴下御自身である天性によつて、私自

身が神であるとする驚くべき狂氣の沙汰以上に傲慢なものがありませうか。然し私は變るべきものでムいました。なぜかなれば、私が賢くならうとした願ひは、悪るいものからより善くならうとする願ひであることは明かでありましたから。けれどもなほ私は貴下と同じものであると自分を思ふよりも、寧ろ貴下が變るべきものだとの考へを擇びました。だから私は跳ね返され、又貴下は風のやうな虚しい私の頭冥を斥け給ふたのでムいます。私は心に或る具體的な形を想像して、肉であるから、肉を呪ひました。又「吹き過ぐる風故、私は貴下に歸らなかつた」(詩篇第七十)(八の三十九)のです。然し私は貴下のうちにも、肉體のうちにもなく、又貴下の眞理によつて私の爲めに造られたでもなく、只私自身の虚妄によつて、物體から案じ出された、非實在を果てもなく追ひかけました。又私は貴下の忠信な子供である、私の同胞市民に訊ねました(私は自分では知らぬうちに、その仲間を追ひ出されてしまつたのでしたのに) 私は彼等に質問したのです、(私はまったく馬鹿なお喋りやでした)「では神の造り給ふた魂が何ぜ過ちをするのか」と。けれども私は「では神は何ぜ過ちをす

るのか」とは訊かれたくはなかつたのです。私は、自分の變化すべき本質が自由意志によつて迷ひ、私の過ちが即ち私の罰であつたと告白するよりも、寧ろ貴下の變化しない實質が拘束を仕損じたのであると、頑固に主張致しました。

私が此本を著したのは多分十六か七でしたらう。當時は是等の物體的な架空な説に浮身を寔しました。お、甘い眞理よ、寧ろ貴下の内部的な妙音に傾けてゐた心の耳は當時矢張りそんな空論に蟬鳴して、始終私の「美とその適合について」か、づらひながら、立つて、貴下に聞き、貴下の新郎の聲を聞いて、悦ばうと冀つたのですが、それは出来ませんでした。其理由は私の過ちの聲により、私は自身から追ひ出され、又私の傲慢の重みによつて、最も低い坑なに沈んだからでムいます。貴下が私に喜びと愉快とを聞かして下さらず又未だ碎かれてゐなかつた私の骨を歎ばして下さらなかつたからでムいます。

## 十六 アリストテレースの影響

私が未だ二十才にもならない時、アリストテレスの「十個の範疇」といふ本が手に入りました。私のカルターゴに於ける修辭學の先生や其他の大學者と崇められた人々に名聲噴々たる本でした。が私がそれを讀んで何になりましたらう。最初私は一種偉大で、神聖なもの、やうに熱心にそれに取り着きました。けれども再讀して、果して私は單獨にそれを理解しましたらうか。又後、非常な苦心を以て、最も有爲な師傅について、雪に頭の教授を受けたばかりではなく、又その構造や例證を地面に描いてまで教はつた人達に訊ねてみても、矢張り、私が獨りで讀んでさつた以上それについて知ることは出来ませんでした。此本は私に人とか、その性質とかいふやうな實質を明かに語つてゐるやうに思はれました。たとへば人の顔のことなら、それがどんな種類のものか、又<sup>せい</sup>丈ならば、幾尺とか、その血縁は、誰の兄弟であつて、何處にゐて、何時生れ、或は何處に立つてゐるとか坐つてゐるとか、又は靴を履いてゐるとか、武裝してゐるとか、何かをしてゐるか、それとも他にさしてゐるかといふやうな事や、今私が上に述べた此九つの部類に編入せらるべきも

の、換言すれば實質の範疇に編入せらるべき無数のものを總てを、此本が明瞭に示してをるやうに思はれました。

斯麼ことが私に何の利益となりましたらうか。それは寧ろ邪魔にこそなりました。私は萬物は總て此十の範疇のうちに含まれるものと思ひ、あゝ私の神よ、貴下の驚くべき、不變の單一をも、恰も貴下も亦貴下御自身の大と美とに隸屬在すもの、やうに解しようと試みました。ですから物體に於けると同じく、大も美も、貴下のうちに在つてその主體として存在するものと致しました。けれども貴下御自身か偉大で、又美で在すのです。けれども物體は餘り大きくなからうが、餘り美しくなからうが、矢張り物體に過ぎないことを見れば、それは物體であるが故に偉大でも、又美しくもないのです。けれども私が貴下について考へたことは虚妄であつて、眞理ではなく、私の辛慘の妄想であつて、貴下の慶福の實際ではなかつたのです。何ぜかなれば、貴下は私の爲め地に荆棘と薊とを生やし、又額に汗して私の食を得なければならぬやうに命じ給ふて、その通りになつてをるのですか

ら。(創世記  
を見よ)

又私のやうな悪い情慾の奴隷である者が、所謂自由と稱ばれる是等學術の本を、私の目の及ぶ限り澤山読んで、それを獨りで分つたからとて私に何の益がありましたらう。又私はその本を悦んでも、その中にある真理と確實とが何處から來たかを知らなかつたので、私は光りに背を向け、顔を照らされてゐる物に向けました。だから照らされてゐる物を辨別すべき私の顔そのものは照らされなかつたので、凡そ書かれたものは、修辭學でも、論理學でも、幾何でも、音樂でも、又數學でも、私獨りで、さして困難もなく私が解し得たことは、我が主なる神の知ろしめすところで、といふのは理解の迅速と、辨別の正確とは貴下の賚でありますから。けれどもそのうちから何物をも私は貴下に献げは致しませんでした。だから是は私の益とはならないで、却つて私の亡滅の基となりました。私は自分の財産の此様に尊い部分を、自分の手に握り、自分の力を控え置いて、全然貴下に向けないで、「貴下を離れ、遠國に行いて、娼婦に費したからです」(路可傳第

十五章)

善い物として、善く用ひられねば私に何の益がありませんか。勤勉にして、才能のある者ですらも、是等の學術を理解することは面倒なものです。私は後に之を自分が他に説明してやらうとするまでには、そんなことをちつとも感じなかつたのでした。しかも私の説明を聞いた者のうち、最も秀才といはれる者ですら、單に遅れず、私の説明について進める人が即ち秀才であつたのです。

けれども主にして真理に在す神よ、貴下が宏大な光明體にましまして、私は只その一部分であると想像することが私にどんな益を與へましたらう。餘りに甚しい邪惡です！私は當時そんな悪い人間だつたのです。しかも我が神よ、公けに冒瀆な言葉を吐き、貴下に對して反くことを恥としなかつた私が、憶面もなく貴下に對して、貴下が私に下さる御憐愍を告白して、厚ケ間しくも貴下を御呼び申したのでした。だから當時、よしや私が人に教はらないで是等の學術書や、難解極まる書籍を讀みとくだけ智恵がすぐれてゐたからとて、若し信仰に教理に於て斯麼愚かな誤りをして、斯麼冒瀆な無恥をしたなら、それが何

の益になりましたらう。或は又是よりも遙かに鈍い智が貴下の子供達に何の妨げを致しましたらう、何ぜかなれば、彼等は貴下の教會の巢の中で、安全に羽を生やし、健全な信仰の糧によつて慈悲の翼を養はうとして、貴下から遠く離れ去らなかつたからでういます。主なる、我々の神よ、み翼の陰に私共に希望を與へ、我々を護り、我々を負ふて下さい。貴下は私共が小さいときでも、又白髪になつても私共を負ひ給ふのです。何ぜかなれば私共の堅實さは、それが貴下のである場合に、本當に堅實なのでういますから。けれどもそれが私共だけの場合には跪うういます。私共の善は常に貴下と一緒に住みますが、それから反き去るとき、私共は邪惡となります。主よ今、私共を戻らして、覆されないようにして下さい。私共の善は貴下共に住みて、少しの腐れもなく、その善が即ち貴下であるからでういます。又私共は墮落したからとて、歸るところがあるまいと心配するには及びません、何ぜかなれば私共の留守の間でも、貴下のお家——貴下の永却は絶えることはないのですから。

## 第五篇

### 一 我が魂は神を讃む

私の舌の働きによる、私の告白の供物を受けて下さい。貴下はみ名に告白せよとて、舌を造り、それを動かし給ふのです。「私の總ての骨を癒し、それに、お、主よ、誰か貴下に比ぶべきものがありませう」(詩篇第廿五の二十)と云はして下さい。人が貴下に告白したとて、それは自分の心を貴下に告げるのではういません。鎖された胸も貴下の御眼をよけることは出来ず、人の頑固も貴下のみ手を拂ひのけることは出来ないでういますから。貴下は自分の御意の儘に、或は憐憫をもつて、或は復讐をもつてそれを聞き「物として貴下の和煦から蔽はれるものはない」(詩篇第十の九の第六)のです。けれども貴下を私の魂が愛するように、貴下を賞讃して下さい。貴下の創造全部は貴下を讃美して歇まず、又貴下の賞讃に沈黙も致



しません。或は貴下に向けられた聲をもつて人の靈も賞讃を絶たず、有情無情の被造物もそれを瞑想する者の聲を以て褒めて歌むことがありません。それは我々の魂がこの疲勞から立つて貴下に向ひ、貴下の造り給ふた是等のものに寄りすがり、奇しくもそれを造り給ふた貴下に行かうといふからなのであります。蘇生と眞の力は其處にこそあります。

## 二 神の不可避

不安な者、不信な者は貴下から遁れるが、いゝです。けれども貴下は彼等を照覽しますのであります、彼等の暗黒をも推知し給ひます。けれども如何であります、彼等は汚ないけれども、彼等と一緒にある宇宙は美しいではありませんか。しかも彼等はどれ程貴下を損ひましたらう。或は又天から此最低の地に及ぶまでも正しく且つ完全な貴下の御支配をどれぐらゐ汚しましたらう。彼等はみ前を遁れたとき、何處へ遁けましたか。又貴下は何處に彼等を見出し給はなかつたでせう。只彼等は自分を見そなわす貴下を見まいとして遁

れたのであります。盲目滅法に貴下に躓く爲め、(何せかなれば貴下は自分の造り給ふたものを棄て給はないのですから) 即ち不義なものが貴下に躓いて、氣儘に貴下の柔しさから身を退いたがもとで、貴下の正義に躓き、貴下の嶮難に仆れて (cadentes asperitatem funi と譯したが或る英譯は their own 「彼等自らの」と) 當然の傷を負はされる爲めに遁れたのであります。噫、まづたく彼等は如何なる場所も貴下を固むことが出来ないことを、又貴下が、貴下から遠く離れた者にすらも近くに在す唯一のお方であることを知らないのです。彼等を立戻らして、貴下を求めらうにして下さい、彼等が自分の造物主を棄てたやうには、貴下は彼等をお棄てなさらなかつたのです。彼等を立戻らして、貴下を求めらうにして下さい。貴下は彼等の心に、即ち貴下に懺悔し、貴下に飛び附いて、自等達の嶮路を辿つた後貴下の懐中に泣く心に在すのです。その時貴下はやさしく彼等の涙を拭ひ取り、彼等は愈々泣き、泣いて嬉れしがります。主に在す貴下、血と肉の人間に在さずして、彼等を造り給ふた貴下が、彼等を改造し、彼等を慰め給ふことが嬉れしいのです。けれども私が

貴下を求めてゐた時、貴下は何處に在したのですか。貴下は私の前に在しましたのに、私は貴下を遠く離れてゐたのでムいます。又私は自身すらも見出さなかつたのですから、ましてや貴下などは猶更でムいました。

### 三 フアウストスに會ふ

私は自分の二十九才の齡を、私の神のみ前にのべませう。其時カルターゴにマニケウス教の司教で、フアウストスと稱ばれる大きな悪魔の良が参りまして、その巧辯の誘ひに多くの者が陥りました。私はその辯を推奨はしましたけれど、私が當時熱心に習はうとしてゐた事物の眞理とはちがつてゐることは知つてをりました。なほ又此フアウストスが、私に喰べさせよとして私の前に置いた學問の御馳走に比られば、それ程人々には稱讃せられてゐた辯舌の器は私にとつては左程有難い物ではムいませんでした。前から彼はあらゆる有用な學問に精通し、又總ての高級な科學に熟達してゐるといふので名高かつたのです

又私は斯うした哲學者達について多く讀み、熱く記憶してゐましたので、マニスケウ教のその長い作り話と、哲學説のうちの或るものとを比較してみて、後、學者達の説が眞であることを見出しました。尤も哲學者共は只此下界の批判をするだけが有力で、主のことに ついては何の手段をも彼等は見出さなかつたのでムいます。何ぜかなれば貴下は偉大に在して、お、主よ、そして遜る者を願ひ給ふも、傲慢なものは他所に見給ふからでムいます。又貴下は心に悲しむ者により外には近寄り給はず、傲慢な者によつて見出され給はず、又彼等が不思議な術によつて星や砂を算へ、星の天を測り、遊星の通路を究めても、貴下は見出され給ひません。

何ぜかなれば、貴下が彼等に與へ給ふた理智によつてこそ彼等は斯るものを搜し出すのでムいますから。そして彼等は多くを發見致しました、又日蝕と、月蝕を多年の前にあつて、何日、何時に何分何厘蝕があると豫言して、その推算は間違ふことはムいません。彼等の豫言はそのとほりに成り、彼等はそれを規則として書きとめましたので、それは今日

でも讀まれ、それに據て他の者共が、何年何月に、月又は日の何の部分か蝕すると豫言すれば、その豫言のとほりに成るのであります。斯様なことを、此術を知らない者は不思議がり、驚き、是を知つてゐる者は褒められて、威張ります。そして不敬虔な傲慢によつて貴下から離れ、貴下の光りを失ひ、自分の光りが蝕してゐることは見ないで、ずつと前から太陽の光りの蝕することを豫見致します。何ぜかなれば彼等は敬虔に何處から彼等が是を搜出す智恵を得たかを捜さないからであります。又貴下が彼等を造つたことを發見して、貴下が造つたものを保存なさるやうにと、身を捧けて貴下に仕へないばかりか、自分が自分を造つたものゝやうに考へて、貴下に犠牲を捧げません。又空の鳥のやうに天翔ける彼等の想像を殺さず、又海の魚のやうに、深淵の秘密な小徑をさすらう、彼等の好奇心をも殺さず、或は又野獸のやうな彼等の奢侈をも殺しません。是は主よ、「焼き盡す火に在す」(申命紀第四  
章の廿四節)貴下が、是等の死んでゐる配慮を焼き盡して、彼等を不滅のものに再造し給ふ爲めであります。

けれども彼等は貴下の「言葉」、(ヨハネ傳第一章  
第一節以下參照)即ち其御方によつて彼が算へてゐるもの、算へてゐる彼等自身や、彼等に算へさせる感覺やが造られてゐること、又「貴下の智恵は數限りない」(詩篇第百四  
十七の第五)といふことを知らなかつたのであります。けれども生み給へる獨子自ら、我々の爲めに智恵と、義と聖となり(コリント前書  
第一章三十節)私共の人数に算へられ、カイザルに貢を納め給ひました。(馬太傳第七  
章二十七節)彼等は自分からその方に降りて行く道を、又その御方によつてその御方に昇る道を知らなかつたのであります。此道を知らないで、自分等は星の間にあつて、輝いてゐると思ひました。然るにどうです、彼等は地に墜ちて、彼等の愚かな心は暗くなつたではありませんか。造られた物についてなら、彼等は正に多く眞實なことを申しました。けれども被造物の造物者たる眞理を恭しく捜すことは致しませんでした。その爲めに彼等は其御方を發見しませんでした。或は發見しても、神に在すことを知り、神として崇めることを知らず、又感謝もしないで、只その想像に慢じ、自分自身貴下の物であるのに、彼等自身のものであるとして、自らを賢いものと致しました。

斯くて甚しき盲目の癖見により、彼等自らの性質を貴下に歸し、眞理に在す貴下について嘘を贋造し、「朽つることなき神の榮光を變へて、朽つべき人、および鳥、獸、匍ふもの、像とし、貴下の眞理を變へて偽りとなし、造主を措きて、造られたる物を拜し、且つ之に仕」へるのです。(羅馬書第一  
章二十三節)

けれども斯うした被造物について、私は此人々から多くの眞理を受けました。又計算、時季の連續、星の觀測等からその道理に適ふことを見、それを教主マニケウスが、是等の問題について、狂氣じみて最も廣く書いてゐたことに比較致しました。けれどもファウストスは日至、平分、發光體の蝕について知つてゐるでもなければ、其他私が一般の理學書から既に教はつてゐた此種の事柄について正しく解してゐるとも思はれませんでした。けれども私は信ぜよと命じられました。又それは計算によるも、私自らの眼によるも、合つてはゐらないで、却つて全く反對でした。

#### 四 神を知らぬは不幸

では主なる眞理の神よ、誰でも最等のことを知つてをれば、その爲めに貴下の御氣に召しますか。確に斯る事を皆知りながら、貴下を知らない者は不幸でムいます。けれどもたとへ之を知らないでも、貴下を知つてゐる者は幸福でムいます。又貴下も、是等も共に知つてゐる者は、その物の爲めにより多く幸福なのではなく、只貴下を知り、神として貴下を崇め、その念ひに虚しいところなく、感謝してゐるならば、貴下の御蔭によつてのみより幸福でムいます。たとへば木を自分の所有にすることを知つてゐて、その用に立つが爲めに、貴下に感謝を言ふ人は、その高さが幾丈あつて、その幅は幾尺かといふことを知らないでも、之を充分に測り、その枝を皆算へながら、自分のものにしよともせず、またその造主をも知らず、愛もしない人よりは遙に幸福です。忠信な人も亦此のとほりでムいます。一切の富をあけて全世界はその人のものでムいます。又萬物の仕へまつる貴下に

頼る事によつて、「彼は何も有たざる者の如くなれども凡てのものを有つてゐる」(後書第六  
章第十節)のです。彼は大熊星の軌道をさへ知らないにもせよ、貴下を知らない者よりも幸福で  
あるか否かを疑ふのは愚でムいます。諸天を測り、諸星を數へ、諸元素を秤量しながら、  
萬物を測り、算へ、又秤量して分布なさる貴下を顧みない者こそは何たる不幸でムいませ  
う。

## 五 マニケウスの邪教

けれどもマニケウスに、斯るものを書けと命じたは誰ですか。斯る技巧は信仰の要素で  
はないのでムいます。何ぜなれば貴下は人に向ひ「見よ敬虔は智慧なり」と仰せられたか  
らでムいます。彼等は斯る物については完全な智識をもつてゐましたけれど、此敬虔につ  
いては無智でムいました。けれども彼等は此事を完全に知らないで、潜越至極な教へをし  
たのを見れば、彼は明かに信仰に關する智識を得ることが出来なかつたのでムいます。何

ぜかなれば斯麼世間的のことを知つてゐたからとて、公言するは空威張りに過ぎませんけ  
れど、貴下に對して懺悔することは敬虔の行ひたるが故でムいます。此爲に彼は迷つてし  
まひました、そして彼が斯る物について多辯を弄したのは、その事に眞に精通してゐる人  
々に訶なかれ、他の一層深遠なものについて、彼の理解がどんなものだか知れたからなんで  
ムいます。彼は自分を卑しく思はれたくないばかりではなく、進んで「聖靈即ち貴下の忠  
信な者の慰藉者、致富者にまします御方は、その全權を以て、人格的に彼のうちに在る」  
と説いたからでムいます。だから諸天と、星辰、日月の運行について彼が偽りを教へたこ  
とが発見されたとき、たとへ其事は宗教の教理には關係がなくとも、彼が冒瀆な矜持は充  
分かでムいます。彼は營に自分の知らないばかりでなくて、恰も神聖な人にすると同様、  
是等のものを己れ自らに歸せしめようとする程狂暴な傲慢を以て捏造したものの述べ傳へた  
からでムいます。

キリストを信する兄弟達が其事を知らないで、或は誤解して語るのを聞く時、その人が

自説を述べるのを見てゐるだけの辛棒は私にもムいます。又萬物の造り主に在す主よ、貴下にふさはしからぬ何物をもその人が信じない限り、たとへ具體的な被造物の位置又は特性について知らぬといふことが、その人を損ふと私は思ひません。けれども若しそれが信仰の教義の眞髓に關はるものであるとして、自分か知らないことを頑固に言ひ張るならばそれはその人に害となります。けれども信仰が搖籃の中に於て、此通りに弱くあつてすらも、母なる「慈愛」は、新たに生れた者が成育して、一人前となり、「様々の教への風に吹きまはされない」やうになる迄はぢつと忍耐して下さるのです。けれどもマニケウスは道を説いて信者となした人々の教師、著者、導者、或は上長であると自稱し、自分に従ふことを、單に人間に従ふのではなくて、主よ、貴下の聖靈に従ふことであると思はせました。一度偽教の實が訶くわかれたら、此様な狂妄が詰責せられて、排斥を受くべきは見易いことでもいます。けれども私は未だ、晝夜の長短、變化、並に晝夜そのもの、又日蝕、月蝕、その他私が諸種の書籍で讀んだ此類の説が、一切彼の言葉によつて解釋がつくかどうかを明

瞭に見定めることは出来なかつたのでムいます。よし又解釋を私がつけ得たにしても、果してその通りであるや否やは依然として不明でしたらう。けれども私は、彼の神聖が認められてゐる故を以て、彼の權威は信じたでムいませう。

## 六 フアウストスの淺學

斯様に私は迷ひながら、此教を聞くこと殆んど九ヶ年間、熱心にファウストスの來るを待つてをりました。その理由は斯教の人々で、私が出會つた程の人は、誰一人私の質問に説明を與へることが出来なかつたので、私にファウストスを奨め、彼が來て、一緒に談したら、そんな疑問や、より大きな疑問（若しあれば）も至極容易に、又明快に解決し得られやうと言つたからでムいます。聽て彼が來ました。すると私は彼が辯舌に巧みな人には相違ないけれど、そのいふところはいつも他の人達が談してゐたゞけのことで、それを美しい辭でお喋りするのに過ぎないことを知りました。然し立派な給仕のよいお躰も、なほ

高貴な酒を欲しがつてゐる、渴えた私に何の役に立ちませう。そんなことはもう私は飽きあきするまで聞かされてをりました。又巧妙に語られたからとて、それか優れてゐるとも、乃至は雄辯であるからとて、その魂が智恵に満ちてゐるとも思はれなかつたのです。けれども私に、ファウストスを期待させた人々は物事を良く批判し得る人々ではゐりませんでした。ですから彼の辯舌はすつかり彼等の氣に入つたので、彼等はファウストを賢者と見ました。然し私は、世にはもう一つ別な種類の人間があつて、若し流暢、豊富な言辭を用ひて語られるなら、却つて眞理をも疑つて、不安を感じるといふことを知つてをります。でも、私の神よ、貴下は不思議な、未知の方法によつて私を教へ給ひました。だから私は之を信じました。それは眞理であるからでゐいます。のみならず何處で、又何處から來て私の心を照らしたにもせよ、貴下の外に眞理について師となるべきものはゐりませんのですから。だから私は今貴下から下の如きことを學びました。即ち、雄辯に語られたからとて必ずしも眞だとは思はれぬ、又秩序なく、訥辯で言はれ、ばとて、偽りとは限らぬ。更

に又粗笨述べられたから眞で、派出な言ひまはしをしたから偽りだといふわけにもいかない。畢竟、賢と愚とは恰も一つは滋養分のある食物、他は滋養分のない食物のやうなもので、修飾した言辭と、無修飾の言葉とは、丁度一つは都會の磁器、他は田舎の土器のやうなものがある。しかも何の食物を、どの皿に盛らうが一向差支へはないと。

ですから斯く迄永く、ファウストスの來ることを熱望してゐた私の心は、彼が論辯する時のその舉動と、感情と、又その觀念に着せる適切流麗な言辭によつて、すつかり悦ばされたのでした。で私は悦び、多くの人々と一緒になつて、否寧ろ彼等より以上に彼を賞讃しました。けれども聴衆の集會で、私の迷つてゐた事を質問して、親しく彼と言葉を授受することは許るされなかつたので、私は困つてゐました。がとう／＼私は親近な者共と一緒に、ファウストスが人と議論しても不都合のない機會を捉へて談話を交へることが出来ましたから、兼てから私の心に思つてゐた事を言ひ出しますと、私は先づ彼が文典の他に何の高等な學藝にも通じてゐない人間であることを知りました。しかもその文典すらも

やうく普通程度のものでありました。でも彼は若干のツウリウス(シセロの、と前に出づ)の演説集又極めて僅かばかりのセネカの著書、諸詩人の書、ラテン語で、美事に書かれた自分の宗派の書などを讀み、其上毎日辯舌を習つたので、雄辯でありました。しかもその雄辯は、天賦の才と、その一種優美な性質に調和せられて、愈々愉快に、魅力のあるものとなつたのでうみます。主、我が神、わが良心の審判者よ、事實は、今私が回想してゐるとほりではなかつたでせうか。私の心も記憶も共にみ前にうみます。當時貴下は、私に斯麼ものを見せて、それを憎ませようとして、貴下の攝理の秘やかな働きによつて私を動かし、私の諸々の恥づべき過失を私の眼の前に列らべて下さいました。

## 七 期待は裏切られる

私はファウストスが該博であるだらうと想つてゐたそれらの學問に、案外彼が通じてゐないことを充分明かにさつたとき、私の惱みを彼によつて解釋せられるといふ希望を

最早持たなくなつてしまひました。彼はよしやさうしたことを知らなかつたとしても、若しマニケウス教徒でなかつたなら、なほ彼は信徒の眞理を確保し得たのでせうに。まつたくマニケウス教の書には天、星、日、月などに關する長い話が一杯に書かれてありました。私が切望したこと、換言すれば、是まで私が多く讀んで知つた議論に比較して、マニケウス教派の書中に載せられてゐるものが一段優つてゐるか、否少くともそれも同等に理にかなつてゐるかどうか、そんなことをファウストスが詳細に解説し得られるとは私も最早思はなくなりました。けれども斯様なことを考量し、又論破して呉れと、私が申出ましたとき、ファウストスは如何にも謙遜に、自分は敢てその任にあらずと辭退しました。彼は自分にはそれは分らぬのだと悟つてゐたのでうみますが、それでもさう明らさまに言ふことを恥ぢたのでうみました。彼はお喋りではうみませんでした。私はお喋り共にはまつたく弱らされてをりました。彼奴等私にこの事を教へると言ひながら、しかもちつともその事を言はなかつたのです。然しファウストスは、主よ、貴下に向つては正しくないにして



も、彼自身に對しては、決して無頓着ではなく、自分の無智については全然無智ではなかつたのです。といふのは彼が美事に退避し、脱出し得られないやうな争論に、輕々しく加はることをしなかつたからでういいます。まつたく私はその點で彼が好きでういました。私  
が知り度いと熱望したもののよりも懺悔する魂の謙遜は、より美しいからでういいます。そして  
又之こそは更に難しい微妙な問題に對する彼の態度であることを私は發見致しました。

マニケウスの書に向つてゐた私の熱心は斯うして挫けました。又その教徒間に斯くも有名であつたファウストスが、私の様な迷ひについて、解釋し得られなかつたのですから私はその他のマニケウス教の教師等については猶更斷念して、茲に私はファウストスと共に文學の研究を始めました。是は彼自らも熱心に學び、又私は當時修辭學者として、カルターゴの青年達に教へてゐたものでういました。私は彼が聞き度かつたことや、私が認めて、彼の才に適するものとした本を擇んで、彼と一緒に讀みました。只此宗派に入る目的で私がつゞけてゐた努力は、此人を識ると同時に、すつかり消えてしまひました。けれど

も私は全然此派の信徒達から離れたのではなく、却つて、何にもより優つたものを見附け出さない人のやうに、いつか外にもつと優れたものがひよつと出るまでは、しばらく如何なりと、自分が落ち込んだところに満足してゐようと心をきめました。すると多くの者に死の畏となつたファウストスは、私を捉らへた畏にとめて置かうともせず、又私が畏におちたことに氣もつかぬふうで、今は段々とそれをゆるめ出したのです。我が神よ、貴下のひそやかな御攝理に於て、貴下のみ手が私の魂を棄てず、又母の心血が、その日夜、注がれた涙をとほして、貴下に供物として捧げられたからでういいます。すると貴下は不思議な方法によつて私を處置し給ひました。貴下は處置し給ひました、お、我が神よ、なぜかなれば「人の歩みは主によりて定めらる、且つその道を主は喜び給へばなり」(詩篇第三十七)と録してういいます。或はその造り給ふたものを再製なさる貴下のみ手より外に、どうして私共は救ひを得ることが出来ませうか。

## 八母を欺く

貴下は、私が羅馬へ行いて、カルターゴで教へてゐたことを其處で教へることを納得するようにお取計ひなさいました。私は此事をするように、どうして説伏せられたかを、貴下に告白するのを忘れますまい。といふのは此事に於ても亦貴下の智慧の最深の奥義と、私共に對する貴下の不斷の憐憫とを思ひ、且つそれを言はなければならぬからでまいます。私が羅馬に行かふとしたのは、それを私に説き勧めた友人達が、莫大な所得や、高い位置を私に請合つたからではましません。勿論彼等はさう言つて私に勧め、又當時是等のものが私の心を惹くには惹いたのでまいます。

けれど、私の最大、殆んど唯一とも云ふべき理由は、羅馬の青年達は靜かに學問を勉強してゐること、一層秩序立つた規律の下に置かれてゐるので、カルターゴに於てのやうに青年達が氣儘に、又無法に、自分の教師でもない人の教室に闖入するやうなことはなく、

又教師から許可を得ないでは、絶対に教師に近寄らされないと聞いてゐたからでまいます。之とは反對に、カルターゴでは學生達は實に恥づべま亂暴な風習をもつてゐました。彼等は無茶苦茶に他人の部屋へ亂入して、殆んど狂氣じみた舉動を以て、彼等の利益になるやうにと設定して置いた秩序を破壊してしまひました。之が若し習慣だといふ點で、庇護せられなかつたなら、法律によつて當然罰せられる筈の多くの悪行は、彼等は驚くべき程平氣にやつてのけました。貴下の永遠の法律によれば、斷じて正しくないやうなことを、まるで正しいもの、やうに行ふので、それは一層あさましいものたることが明かになりました。しかも彼等は、さうしたところが、罰は受けなかつたと思つてゐるのです。然し彼等は斷然こゝとをその盲目によつて既に所罰せられてゐて、彼等の受ける苦しみは、彼等の所業には比較せられることも出来ない程ひどいのでまいます。ですから斯様な亂暴な習慣は私の學生時代には好まなかつたのですけれど、教師になつてみると、私は他人がこんな行爲をするのを忍んでゐなければならなかつたのでまいます。だから羅馬を知つてゐる者は皆私

に向ひ、其處へ行けば、そんな亂暴なことは行はれないと言つたので、私は羅馬へ行くことを非常に悦びました。けれども眞に我が希望、生ける者の地にて我が得べき分に在す君よ、私の魂を救ふ爲め、地上の住家をかへさせようと、貴下は私をカルターゴでひどい目にお遇せなさいました。して又羅馬に於ては、私をそこに誘き寄せ給ふ爲めに、好餌をそなへ給ひました。何れも死の生命である此世を愛する人々によつてそれを果し給ふたのでいます。即ち最初に名指した地では狂暴な行爲をする人により、後に言つた地には虚しい希望の約束をして私の移住をお誘ひなさいました。又私の行く路を正しくする爲め秘かに彼等の邪曲と、私自らのそれとを利用し給ふたのでいます。何せかなれば私の安寧を素したのも、その恥かしい狂亂沙汰によつて目が見えなくなり、亦私を羅馬へ誘ふた者も土を喰つたからでいます。そして一方で苦がい現實を味つた私は、他方で非現實な幸福を求めました。

けれども何は私故カルターゴを去つて羅馬へ行きましたらう。神よ、貴下は御存じで

いましたけれど、それを私にも、又私の出發を非常に悲しみ、歎いて、遂に海岸までも私を追ふて未だ母に示しては下さいませんでした。私は母が、一緒につれて戻るか、さもなければ、自分もついて共に羅馬に行くと言つて聞かないのを、實は、離れ難い一人の友が船出するところだから、その船が順風につて出るまでは此處にゐなければならぬのだと、母を欺いたのでした。私は此通り母を、そんなに結構な母を欺いて、彼女から逃げ去つたのです。此事でも亦貴下は憐み深くも私を免るし給ひまして、呪はるべき汚穢に満ちた私を海の水から救つて、貴下の恩寵の水に浴させ給ひました。私が洗禮によつて淨められた時、日毎私の爲めに、貴下に向つて、顔の下の土を濡らしてゐた母の眼は、その涙の流を乾かされたことでういませう。さてそれでも私と一緒に歸らないと、母が言ひ張りました時、私はやう／＼のことで母を説き伏せ、船に近い、聖キブリアヌス(原文は Beatus Cyprianus 即ち、祝福されしとあり、之は Sanctus 「聖」の記念會堂のある處に其夜は泊ら人」よりは一つ下の位であるが此處では英佛譯とほり聖とした)の記念會堂のある處に其夜は泊らして置いて、私だけこつそりと立つてしまひました。後に残された母は祈り且つ泣いたの

でういました。主よ、涙を渴らして母が貴下にお願ひしたのは何でしたらうか。貴下が私の出立を御差止めなさるようにといふのでしたらう。それなのに貴下はその深い聖旨により、只母の願ひの要點だけを聞いて、當時彼女が求めたことを聞き届けてお遣しなさらなかつたのでういました。それは母にたえず私のことを貴下に向つて祈らせようといふ御心に出でたものです。風は順に吹いて、私共は帆を張り、岸邊は私共の眼界から消え失せました。翌朝母は濱邊を泣き狂ひ、怨恨と、呻吟の聲をもつて、貴下の耳をうづめてしまいました。然し貴下はそれを顧み給はなかつたのでういます。貴下は私自らの願を以て、その願ひを終局さしてはうと思召して、此通り私を追ひやり給ひました。又一つは母の私に對する肉的な愛着も、悲哀の筈で、至當の所罰を受けさせようとの聖旨に基いたのでういます。けれども私は矢張り世間並の母達のやうに、否寧ろより多く私と一緒にゐたいと望みましたのです。しかも私の不在を利用し給ふて、貴下が彼女の爲めに、どれ程大きな歡喜を成就し給ふのかは知らなかつたのです。彼女は知らなかつたればこそ泣き叫び、此

苦惱のうちに、自分が産んだ者を悲しみながら求める悲しみ、即ちエヅから遺傳して來た罪があらはしました。けれども母は私の詐偽と無情とを責めた後、思ひ直して私の爲めに貴下に執成をして、家へ歸り、私は羅馬へ参りました。

## 九 再び大患

然るにどうです、私は羅馬で肉體の病の筈に迎へられ、その上に人間がアダムによりて死ぬところの原罪の縛めの外、貴下、御自分と、他の人々とに對して犯かした、多くの大きな一切の罪咎とをもつて、今や地獄に墮ちるところでういました。何ぜかなれば（私はキリスチャンでなかつたので）貴下は此罪のうちのいづれをもキリストにより赦らして下さ（いふ文句を入れて讀むべし）らず、又キリストは私の罪により、貴下に對して招くに至りました怨恨をその十字架によつて解き給はず、又幻影の十字架（マニケウス教徒は十字架を斯く見た）によつて、どうして之を解くことが出來ませう。私は（マニケウス教の説に基いて、キリス彼の肉の死は私には虚偽に見えただけに、